機関誌「ハンドボール」300号記念号の発行に寄せて

日本ハンドボール協会の機関誌「ハンドボール」が発刊されて，今号でちょうど300号を迎えました。この30年間，幾多の関係者のご努力，ご支援で続けられてきたこの機関誌の記念号に際し，多くの方々にお願いして，「ハンドボールの過去・現在・未来」をテーマにさまざまな原稿をお寄せいただきました。ここにご紹介させていただきます。（お名前のアイウエオ順で掲載させていただきました。）

機関誌300号の発刊に当たって

安藤純光

㈶日本ハンドボール協会が機関誌を発刊して30年、1960年（昭和35年）6月、第1号が発刊されて以来本年8月号をもって300号を数えることになる。この機会に、この間機関誌の編集発行に、ご尽力いただいた関係各位に厚くお礼を申し上げる。

機関誌「ハンドボール」は、1960年～1964年は年間3～4回の発行であったが1965年からは年間11回の発行となり300号を迎えることになった。機関誌発刊に当たって、故式場隆三郎会長は巻頭言として≪高遠なる理想の礎石たれ≫と題して機関誌発刊の言葉を次のように述べられている。

『昭和12年、日本にハンドボール協会ができてスポーツとしてのハンドボールが我が国に芽生えてから22年経った。しかし、〈ハンドボール〉という競技を知らない人はまだまだ多いし、〈ハンドボール〉という競技の名前さえ知らない人もいる。22年の時日を刻みながら一般に対する普及は、最近になってようやく軌道に乗り始めたとはいえ認識の低さ、少なさは他のスポーツ競技に較べるべくもない。プレーヤーの増加も必要だが、ハンドボールを見、ハンドボールを楽しむファンの増加を心がけなければいけない時機が来ていると思う。そうした時に雑誌「ハンドボール」が生まれることは誠にタイムリーであり、この雑誌を通じてハンドボールのよさを大いに普及して貰いたい。〔以下略〕』

以上は、式場会長が第1号の巻頭に述べられた、いわば機関誌の使命を示唆する文章である。

スポーツは、30年前のスポーツから今日のスポーツへ大きな変化をしている。ハンドボールもまた大きく発展して来ている。しかし、いまこの『高遠なる理想』に近づくための礎石となるために、この文章を心をあらたにもう一度熟読吟味して、使命を達成し得る機関誌として邁進しなければならないであろう。

バルセロナに向かって

市原則之

まずは、300号発行おめでとうございます。発刊後30年近くにわたり、ご編集に携われた多くの関係者に心より敬意を表します。

私は現在日本協会の常務理事を仰せつかり強化部門を担当致しておりますが、この機会を得て古くからの機関誌をめくり、ナショナルチームの今日までの強化過程を振り返ってみますと、その時代時代での先人各位のご苦労がしのばれ責務の重大さを痛感致します。

特にナショナルチームは、男子がミュンヘン以降5回連続してオリンピック出場を果たし、男女揃って出場したモントリオールでは、女子が5位入賞を遂げています。

この裏には、その時代を戦った逞しい選手諸氏のご奮闘の賜物であることは勿論でありますが、何といってもそれらを支援して日本協会を中心にした各界の秀れたアドバイザー各位の〝何が何んでもオリンピックに出場させるん

だ!!〟という強い意志の環境づくりを忘れてはならないと思います。

現在のナショナルチームは、こうして先輩諸氏に残して戴いた〝歴史と伝統〟という遺産の元でバルセロナに向かって、計画的トレーニングを継続していますが、果たしてナショナル周辺には、当時のような燃える環境が整っているかというといささかの不安を感じます。

強化活動は、単にナショナル選手の技術向上だけにとらわれることなく、選手のメンタルな部分を引き出し、〝やる気〟に結びつける環境づくりの事業が必要なことは周知の通りであります。ナショナルチームは国の代表チームでありますが、その選手たちはいろいろな人の愛情で育て送り出された、いわば、みんなの代表であるわけですから、選んだ側（協会）も、選ばれた側（選手、所属先）も、そのことを十分自覚して、理解を深めておかなければなりません。

現在強化部では、実連、学連、高体連外各連盟から選出された強化委員が、男女それぞれの強化委員長の元で種々の施策を立案し実行に移しています。男子ナショナルチームにおいては、スポーツ医科学委員会のバックアップを得て、メンタルトレーニングの一環として、自衛隊の体験入隊し、強靱な精神力を養成する為の降下訓練を行ったり、また、女子の強化委員会では、11月に韓国で行われる女子世界選手権に出場する数ヶ国を日本に受け入れて、ナショナル強化に結びつける為のゲームを各地で計画したり、積極的な強化策に取り組んでいます。この目的は、終局的にはナショナルチームを強くする為のものであるわけですが、間接的には、こうした強化事業を一つでも多くマスコミで世間にアピールし、大勢の注目を浴びせて選手個々のモラルを向上させる強化環境づくりの一環でもあります。その一例が、「ナショナル選手の公募」や「降下訓練」であります。

しかし、こうした施策も一部の実業団を中心としたナショナル周辺だけで実行されている感が強く、ナショナルチームが一般から遊離したところで活動している感がぬぐえないのは誠に残念なことであります。

ナショナルチームは、みんなの代表チームであるわけですから、この点をよく理解してみんなで声援を送って戴きたいと心から念ずる次第であります。

将来に於けるナショナル強化は、ジュニア層、あるいはもっと下の年齢層から段階的に進めて行かなければならないことは、みなさんの認めるところです。これには、従来までの固定観念や既成概念にとらわれない若くて行動力があり、しかも柔軟な思考力を持った人が、ハンドボール界運営に尺山携わって戴けることだと思います。外からの評論家はいりません。中に入って行動を起こし、失敗を恐れない勇気のある人が将来のハンドボール界を背負う人だと思います。

広島でのアジア選手権もいよいよあと1年とせまりました。当大会を成功させ、男女揃ってバルセロナ・オリンピックへの出場を決めるためにも、球界一丸となったご協力、ご支援をお願い申し上げます。

思い出

入江信太郎

機関誌300号の記念発刊おめでとうございます。心からお喜び申し上げます。久し振りに協会からの「ハンドボールの過去の思い出」をと原稿依頼の通知を受けた時、私は思わず「ハッ」と頭に浮かんだものがあった。それは昔京浜国道沿いにあった旧日体の焼跡にあったサッカーのゴールポストである。5~6人の仲間が集まって「今度ハンドボールという競技が始まることになった」と、革製のあまり大きくない固いボールを手に話を始めたのが台湾出身の同級だった林朝権君だった。「どれどれ」とゴールに向ってシュートの練習をしたのが、そもそもハンドボール競技に入った切っ掛けだった。

本来私は軟式庭球が特技で代表選手として神宮大会にも出場し、やがてはチャンピオンにと夢を抱いて日体に入ったのだった。それが何時の間にかハンドボール競技の虜になってもう52年になってしまったのである。今や魅力ある競技として私の生活の一部のようなもの「不思議だなあ―」と考える今日この頃である。

昭和12年だったと思う。ハンドボール競技が東京オリンピックの種目に入るかも知れないと噂がとんだ時だったと思う。「東京オリンピック第一次候補選手」の強化合宿に選ばれ、1938年2月横浜日吉台の慶大グランドで行われたその時の写真が、50周年記念誌として発刊された。「日本ハンドボール史」の標題「日本ハンドボール界の夜明け」にのっている。中央私の隣がハンドボール競技に入る切っ掛けとなった人、林朝権

君である。

監督に阿部二郎先生（筑波大寮官）、マネジャーが外山准二さん、三宅義信君（京都女子大）等私の覚えている人たちが撮っている「幻の東京オリンピック」として私にとって懐しい思い出の一つである。

今はもう忘れられた選手だが、私の教え子の一人だった皆川茂夫である。同窓では、今は亡き三重の日沖修君や日野、槙君もいた。彼が日本を卒業後の就職について相談に来たことがあった。私は二、三の就職先があったが、即座に北海道函館に向かい、「きっと君のためにもなる」と励ましたことがあった。

果たせる哉、彼の努力がみのって昭和26年第1回の日本スポーツを受賞した時のことは今も忘れられない感激の思い出として残っている。

随分と昔の話になったが、もうすでに52年になる。

しかし、私は今、将来のハンドボール競技の発展を考える時、何か物足りなさを感じている。特に少年少女に対する育成である。いつも大会を見るたびに考えるのだが、彼らが1回戦ごとに力強くプレーする素晴らしさに胸をうたれることである。

しかしこの大会に出たくても出られない多くの少年少女がいるということを考える時、問題となる彼らの出場のための補助金調達のための施策を考えねばならないと思う。これは今後の協会の課題として、是非考慮されるよう要望するものである。

普及への提言

蒲生晴明

300号発行おめでとうございます。20数年に及ぶ長い期間、機関誌編集の方々のご苦労に敬意を表します。本当にご苦労様でした。

さて、私も高校1年生からハンドボールをはじめて20年が経過し、現在もハンドボールが中心の生活ですが、今後も同じ状況が継続することと思います。そして20年間ハンドボールを通して、多くの諸先輩や同僚等と大変に意義のある出会いがあり、それを機会に、お付き合いが始まって、今でも相互に情報交換や家族のことなど、一時の語らいを持つことができます。これも、ハンドボールをしてきたおかげであると大変感謝しています。

このような輪をより「大きく・広く・深く」していくために、今回、私自身の夢を提案したいと思います。

私たちハンドボール愛好者は、ハンドボールをより盛んに、より華かなものにしたいと願っており、いうまでもなく各方面で努力している訳ですが、果たして現状のままの努力で盛んになるでしょうか？

たとえば、現在の全国大会は、小・中・高・大学・一般・教員・クラブ等がありますが、チーム数としては中学・高校・大学で大半以上を占めています。すなわち、年代層でいえば、12歳～22歳ぐらいまでに片寄った形になっており、限られた人々がその年代のみで実施していることになります。これだけでは、愛好者は増えませんし、当然盛んにならないのではないでしょうか！

そこで、ハンドボール経験者・未経験者を問わず、また年代も幅広く、多くの人々にハンドボールを愛好してもらうために、私の夢を思いつきですが、述べさせていただきます。

①マスターズハンドボール大会の実施
・40歳以上（ルールは条件付）
・50歳以上（ルールは条件付）

②ファミリーハンドボール大会の実施
たとえば、前半は子どもが、後半がその親がプレーし、トータルで競技

③ママさんハンドボール大会の実施
バレーボールと同様

④ナショナルOB・OGチームによる全国サーキット
・地元チームとの交流ゲーム
・実技指導

他にも、いろいろな企画があると思いますが、いずれにしても、各年代層に応じた大会があってもよいと思うのです。

家庭の中で運動不足の主婦や父親などの参加やハンドボール経験者を引退後も楽しめるようにしていくなどの企画を行なってはどうでしょうか。

ということで、提案をしましたが、強化目的の普及ではなく、愛好者増を目的とした普及を実行していくことが、最終的には、多くの愛好者を生み、その中からすばらしいオリンピック選手を発掘でき、育成していけると思うのですが……。いかがでしょうか。

もう一度、指導者養成を

川上整司

昭和35年5月に創刊号が発行されて、今月号で３００号を数えるまでになった。

まだ、野球以外、スポーツに関する専門の雑誌や新聞が少ない頃、未来に夢を抱いて発行に携わった人たちがいらっしゃったからこそ貴重な資料が沢山、ハンドボール史となって残っているのである。

その古いハンドボール機関誌を繙くと、先輩たちの青年時代の写真と強烈な記事がぎっしりと詰っている。普及、発展をこよなく願う気持ちが伝わってくるようで、新たな奮起をおこさずにはいられない。後進に活字として残していくことが如何に大切かを再確認させられた次第である。

なかでも、昭和38年、７人制に切り替えられた当時の理事長のコラムに、全国の関係者一丸となって世界制覇というような記事もみつかった。最近では、あまり聞かなくなってしまった言葉だが、将来、大きく発展することも含んだ実に素晴らしい感動的なくだりだった。

日本体育協会の中でも機関誌を独自で作り出している協会は少なくなったが、大変なことではあるが、続けて記録を残して行くことが、ハンドの歴史を創ることであり、意義のあることだと思う。

ところで、協会の発展について考えると、巷でのいろいろな議論は、長い間、語り尽くされているし、私も少なからず参加してきたので概略は掴むことができる。それを簡単に纏めると、まず報道機関への働きかけ不足、世界のビッグイベントを国内で開催する、小学生選手の育成、ママさんハンド大会開催、指導者育成、一貫した指導体系確立、ルール改正。学校体育への導入、日本リーグに大企業の参加、ナショナルの強化、など以上のようなことが多いが、この多くの中で今回は、指導者の育成について触れてみたいと思う。中学や高校の体育の授業で最近は、それでも多くなっているようだが、バスケットボール、バレーボール、サッカーに比べると教材として取りあげる時間数がまだまだかなり低い。ここらも普及へのネックのひとつでもある。

中学校から、もうひとつ下げて、小学校の指導者養成を考える必要がある。この小学生の先生方に向けての講習会を開き、種々な方法で参加者を募り、全国各地で何回も指導者講習会を開催すべきである。そしてハンドボールの身体に及ぼす良い影響、ボールゲームの中でも特に素晴らしい要素を持ち備えていることを理解して戴き、真のハンドの良さを知っていただけたら少しずつでもその数を増やして行くに違いない。一人の指導者が生れるとやがて何十人、何百人という選手が巣立つことになる。

京都の田辺町の御協力によって、小学生全国大会も年々盛んになっている。しかし、全国規模の大会としては、まだ、参加都道府県に残念ながら限りがあり、やや物足りなさを感じる。しかし、プレー自体は実に高度で、惚れ惚れするプレーを随所で見かけることができるまでに成長した。このスポーツも例外ではなく、できるだけ早いうちに技術を身につけさせることは、言うまでもないことである。それと同時に、幼い少年、少女たちに、真のスポーツの魅力、そしてその種目の選択の中にハンドボールも加えたいのである。

野球やサッカーの小学生チームは、千単位のチーム数ではなく、万単位だと聞く。それらと比較することはないが、しかし、ハンドボールの全国のチーム数が、人気球技のひとつの市のチーム数にも及ばぬ貧弱さとなれば、これは何をか況んやである。

アマチュア・スポーツの普及は、実に難かしいのである。ここが遅れのポイントであると馬鹿のひとつ覚えのように唱える関係者もいるが、一朝一夕にいかぬから、ここまで遅れているのだと考える。

まず指導者養成が第一だと思うかどうだろうか。そしてもうひとつ、抽象的になるが、責任転嫁ではなく、それぞれ与えられた領域の中で何を成すべきかを十分に練り直し、小学生から日本リーグ、ナショナルに至るまで、各セクションごとに内容を充実させ、普及発展をそれぞれの場で成すことが最も大切なことだと考える。

そして、それらを縦につなげることによって、より充実したハンドボール界ができあがるのではないか。このように他の領域をあまり気にせず、自分の範疇をしっかり確立させることが先決だと考える。その組織図をしっかりと企画する時にきているのではなかろうか。

全国の関係者の力を結集して、身近な目標から達成し、そしていつの日か、世界大会で日の丸を掲げる日を期待したい。

強いナショナルチームをつくろう

北川勇喜

シアトルでのグッドウィル大会で全日本チームが韓国チームに圧勝したニュースを新聞で知り、一瞬報道ミスではないかと我が目を疑った。

しかし数日後、この大会でポストマンとして活躍した斉藤選手から、力強い結果報告を聞き、さらに彼が野武士のような逞しい顔形さに変身したのをこの目で見て、なるほどと合点がいったのである。

そして、これからの1年間の努力でチーム力がさらに充実し、ミュンヘンからバルセロナへと続く悲願を津川軍団が必ず実現してくれるに違いないという期待感が沸いて出て、ひそかに広島でのオリンピック予選に心を馳せているこの頃である。

ところでバルセロナでは、津川監督の右腕となり、いろいろな経験な勉強をして一段と成長するであろうミスターハンドボールＧＡＭＯが次のリーダーとなって強い

ナショナルチームを育成し、世界で軍団の采配を揮う時こそ、メダルへの絶好のチャンスであると信じて疑わない一人である。

　したがって日本協会は、このチャンスを逃がさず、何をおいても強いナショナルチームをつくる為に形振構わず、真剣に打ち込むべき時に当たると考えている。

小学生にハンドボールを広めよう

　ハンドボールと共に歩んだ30年の経験と知識を生かして今回、イラストハンドボールを世に出すことになり、そのはしがきでも述べたが、このスポーツの良さは、人間の基礎的な運動能力である走・跳・投を基盤にして技術や戦術を獲得し、これを発展させて競技するところにある。いわば、このスポーツの競技力がよりうまく、より強くなれば他のスポーツをやる時に大いに役立ち、また、ハンドボールで獲得した技術や戦術が他のスポーツへと転移が可能なところがこのスポーツの魅力でもある。

　この特性と魅力が、小学生体育やスポーツに最もふさわしいスポーツであると常々考え確信をもっている所以でもある。

　したがって、日本のハンドボール界としては強化問題に限らず長期的な展望に立って将来に夢を描くことも、また必要な時でもあろうと考え、その手始めに、子どもたちが喜びそうな東京ドームでの小学生全国大会の事業を日本協会で企画立案し実行してみたらどうだろう。

　ハンドボールの裾野の広さや厚さを増す手段や方法はいろいろあろうが、現段階では何かことを起こしてきっかけをつかんで波に乗る戦法こそが斯界にとって最善の道と考える次第である。

世界選手権大会を日本で開催しよう

　今年の秋、韓国で女子の世界選手権大会が開催される。韓国ハンドボール界は、ソウル・オリンピックでの快挙の余波を利用してさらにハンドボールのボルテージをあげようと協会関係者が一丸となって頑張っている。また、我が国に目を向ければ、日本サッカー協会が来たる２００２年に、ワールドカップを開催しようとしてアドバルーンを上げ活発に動き始めている。

　いずれも我々にとってはうらやましいかぎりではあるが、考えてみればミュンヘン・オリンピック時の3年間で１９１校、ロス・オリンピック時に82校も高校のチームが伸びたり、また全日本女子がモントリオール・オリンピックで5位入賞を果たした翌年は50校以上の伸びを示し、オリンピックと普及との関係が明確に証明されている。さらに、今後我が国で世界選手権大会が開催されれば、外国の超一流選手の巧みなボールテクニックからくり出される多彩なパスワーク・パワフルでダイナミックなロングシュート、アクロバティックなプロンジョンシューターと果敢なゴールキーパーとの一騎打ちなどはスリルそのものであり他の競技には見られない痛快なスポーツとして、きっと日本国民に受けるに違いない。

　このように、強化と普及の一石二鳥の効果があがる世界選手権大会を是非２０００年代に開催し、しかも機関誌の４００号を飾る大会にでもなれば最高である。

　この夢を実現するためには、この事業の成功につながる態勢の立て直しがまず第一であり、財源問題、PR活動、メディア対策、国際渉外などの事業の核となるセクションに、フレッシュな感覚と行動力を持つ若い人材が絶対必要であり、これらを発掘、育成し組織で思い切り生かすことができるかどうかに鍵がかかっているといえよう。

マイナーよりメジャーへ

島田清史

　昭和52年、斉藤英四郎氏が協会々長になられたのと同時に私は財務担当の常務理事として協会に入った。斉藤氏は新日鉄の社長になられた許りで私には雲上の人だったが、奥方が私の竹早小学校の同級生だったという心やすさから「新日鉄はラグビーにしろバレーにしろ最強の部がいっぱいあるのに何でハンドボールの会長になられたのですか?」「私はマイナーなスポーツをメジャーにするのが楽しみで好きなんだ。大同製鋼の林君の勧めもあって引き受けた」とのことだった。協会が財団法人にすることができたのは新日鉄の社長であった斉藤氏の尽力があってのことだと思う。当時協会の会計は入る金と出る金とが毎年度キチンと決まっていて財務などというものではなく経理の仕事だった。そして、財団法人設立と同時に私は役職を辞任させて貰った。昭和62年協会創立50周年の祝宴の席上、斉藤会長、林副会長同席の折「10年前と全く同じ。ハンドボールは相不変マイナースポーツ。せっかく財団法人にしたのに協会は5千

万円の年間金利2百数10万円程度を協会の運営費に回すのみ財団法人というのは社会的に信用のある法人なんだから企業、マスコミとタイアップして企画、宣伝、いわゆる興行を打たなければ永久に死に体ですよ。」「君のいう通り。そうするように努力する。」とのことだった。

球技というのはグランド（コート）が狭くなればなるほど体格（特に身長）が問題となる。サッカー、ラグビー、（11人制のハンドボール）等はさして身長は問題にならないが、バレー、バスケ、ハンドボール、テニス等は特に身長が問題になる。スポーツ花盛りの昨今では、実力のある者は最初に金になるゴルフ、野球に流れ、次に皆にもてはやされるバレー、バスケ等に走る。高校時代ハンドボールをやっていた者でさえ、大学に来ると長身の逸材は華やかなバレーやバスケに行ってしまう傾向にあるのは残念だが致し方ないことだ（私自身も昭和13年慶応入学当初サッカー部を志したが15年に開催される予定であった東京オリンピックに全日本代表として出場できるということだけでハンドに入った）。ハンドボールに優秀な選手を集めるなら企画、宣伝して観客の多い華やかなスポーツにしなくてはならない。アゴ、アシ付きで日本代表と接戦するような東欧のクラブチームを呼んでも全く意味ないし、東欧の各国の代表チームを1チーム呼んで全日本と対戦させても実力の差がありすぎて白ける許り。理想は東京で世界選手権をやるとか、世界の強豪を集めてジャパンカップをやるとかすることだ。ただし、強豪2チームのエキジビションマッチだけは駄目だ。名誉とか賞金のかかったものでなければ選手は本気でやらない。昭和15年夏、当時学生リーグ1位、2位の慶早が朝鮮半島に釜山、元山、平穣、京城と普及宣伝のためにエキジビションマッチを行なったが、何の賞もかかっておらず、旅興行みたいなもので全く熱が入らなかった。

昔からそうだったが、協会と現場（実業団リーグ、学生リーグ等）は個々に走っていて余り密接でないような気がする。ハンドボールの普及はもうすでに十分進んだのだから、これからはメジャースポーツに押し上げる努力をしなくてはならない。それには実業団、学生、その他熱意のある人々（改めて50周年号を読みかえしたがそういう人はいっぱいいる）を顧問に迎え、いろいろと懇談してよい企画をたて、会長に後押しして貰うことが先決だ。

斉藤会長の実力をもってすれば企業もマスコミも大いに協力してくれるものと確信する。そしてマイナーよりメジャーへだ。

思い出

嶋田新太郎

私がハンドボールを始めたのは、日体入学の昭和13年から始めて今日まで53年が経過しました。

思い出は数多くありますが、栄誉より誉誉に至るまでの苦しい練習、真っ暗な中でボールの行へを追って大学7年を3年のわれわれが追い駆ける執念と努力、そして優勝の夢を果たした喜びは私たちだけが味わった感激だと思います。

昭和14、15年度の全勝、戦後の全日本総会の優勝、これは今の若い諸君とはおよそえんの遠い11人制の時代であります。

選手時代を終り、指導者の立場となり、多くの数え子たちに対し私は常に基本に忠実であれと基本重視を強調してきました。

最近は外国選手との交流も多く、接触する機会にも恵れ、特に1979年の世界ジュニア女子選手権大会の団長として西ドイツ、ユーゴスラビアへ遠征した時を含めて、また日韓高校交流大会を通じて、日本としてはどうあるべきかを私なりに感じるものがありました。

一番大切なことは、人々の話を聞くことが大切だと思います。

同じこともいっているから新しいものではないという自己イズムは、人のいうことを聞こうとしないことであります。

日本選手は何回外国へ遠征し、試合してきたか数えられないくらい経験しています。

カッコいい球さばき、流れるようなパスワーク、それだけがハンドボールと思っておられるなら大間違いだと思います。日本のハンドボール、特色のあるハンドボール、日本にしかないハンドボールが必要ではなかろうか。背が大きい、パワーが優れているだけが競技を左右するわけではない。日本人だけができる技をもう一度原点にかえって考えて見る必要があるのではないでしょうか。極端ないい方をすれば、日本選手は佐渡ヶ島で隠密特訓をして世界大会に臨むべきであると考えます。

もしそのようなことはできないというなら情報を獲得できる体制を確立することが肝要であります。

今、日本が世界の日本を目指すなら基本と情報、隠密特訓が日本のハンドボールをより高いものに

することができると思います。ハンドボールを愛する一人としてこんなことを考えております。
この秋から高岡法科大学にハンドボール部が創立され私が面倒を見ることになりました。
私の信念と私の思いを若い学生にブッツケてやって見たいと今からわくわくしております。
機関誌発刊300号を祝し、私のつたない一文を寄稿できたことを感謝し、機関誌の充実とご発展と日本ハンドボールの隆昌を祈念いたします。

改めて刊行の意義を

杉山　茂

日本協会は、昭和27、28年ごろ、「協会報」という機関誌を関係者に配布していた。

私も、2、3回それを手にしたがいつの間にか消滅。

学窓を卒えてマスコミの世界に入ったあとのある日、当時の協会幹部のかたと雑談している時に、「協会報」復活が話題となった。

そのころ、デイリースポーツの東京に立教で活躍された小川励行、関西に関学黄金期のエース、渡辺一己の両氏がおられ、私は、このお二人が手をさしのべて下されば〝書き手〟は十分に揃う、問題は協会側の体制、と言った。

この話を聞いていた同席の新日本スポーツ紙の主宰者、宮沢宏之氏が発行の面倒を見て下さると言い、資金面は式場隆三郎会長（故人）に相談しよう、となったものだ。

この思いつきのプランは、順調に走り出し、昭和35年の5月創刊号が〝完成〟した。復刊号とすべきかどうか迷った記憶がある。

それから30年、今月で300号。よく続いていると思う。

競技団体の多くは「機関誌の刊行」を事業の一つに組み入れているが、ほとんど発行―休刊―復刊の繰り返しで、やがて復活のメドがたたぬ眠りに入る。その点、「ハンドボール」は歴代スタッフの、文字通り「必死」の努力で息をついている。誇っていい。

私も、「必死」になった時期がある。撤夜で原稿を書いた思い出が、今では懐しい。

機関誌の難しさは、内容が堅く、体制側の情宣活動にページが埋るためのマンネリ化にある。

商業誌ではないため、この線からの脱皮が難しい。

スポーツイベント社が商業（専門）誌を送り出すようになって、機関誌の立ち場は、ますます厳しくなってきているようだ。

それだけに、毎月キチンと刊行され、300号になったのは凄い。

もちろん、内容的には注文もある。

体制内の人たちが、少しも自分たちの活動（事業）を、機関誌を通してPRしようとする姿勢が感じられぬのは、最大の不満だ。

機関誌に目を通していれば、日本協会がなにをしようとし、なにをしているかが分からなければ、本当は、発行の意味がない。

機関誌がつづくかどうかは読者の力でもなければ、広告提供者の善意でもない。日本協会そのものが、この刊行事業をどう活用するか、真面目に取り組むかどうかなのだ。読者たちは、その意気を誌面から感じとれば、少々、内容が官報的でも、つきあって下さるにちがいない。

400号、500号を迎えられるかどうかは〝この一点〟につきよう。

学校教育とハンドボール

髙田日呂美

機関誌「ハンドボール」300号おめでとうございます。私が機関誌と出会ったのは、昭和36年関東学生ハンドボール連盟の学生委員をしている頃である。当時日本ハンドボール協会は、お茶の水駅聖橋際にあった岸記念体育館の中に日本体育協会などと一緒に入っていた。本造の建物、玄関右側の細長い建物の2階にある細長くて狭い部屋だった。あの頃からすでに30年、日本ハンドボールの発展には目を見張るものがある。

私にとってのハンドボールの思い出の一端の紹介とこれからのハンドボールに思いを馳せて、300号のお祝いとさせていただくことにする。日本ハンドボール協会創立40周年記念式典が昭和53年に行われたが、その前後からほぼ10年余を私は日本ハンドボール協会の理事などとして仕事をさせていただいたことになる。この間、日本協会の財団法人化、賛助会の設置、国体二部の実施、ロサンゼルス・オリンピックへの参加、創立

50周年などがあった。記念式典は、40周年、50周年とも斉藤会長のもとで実施されたが、担当の一人としてささやかではあるが、さわやかで記念すべきものであったと思っている。

昭和55年には、モスクワ・オリンピックに出場が決定しながら、日本の不参加で出場を断念するということがあった。この時は、バレーボールもバスケットボールもサッカーも日本は出場資格がなかったので、我が日本ハンドボールにとってはまたとないチャンスであっただけに誠に残念であった。

さて、これからのハンドボールについてであるが、競技力の向上については他の方々からの提言があると思うので、私は学校教育の中でのハンドボールの在り方について触れてみたい。平成元年度に文部省から告示された新しい学習指導要領は、現在の移行期間を経て、中学校は平成5年度から、高等学校は平成6年度から実施される。体育では「運動に親しむ習慣の育成」と「健康の増進と体力の向上」が目標として明示されている。これは生涯体育・スポーツの観点を重視したためである。体育の改訂の柱の一つとして、中学校、高等学校とも運動の領域・種目を生徒が選択して履修することができるようになることが大きな特色である。ハンドボールはD球技の領域の中の種目として位置づけられているので、学校の特色、地域の状況、生徒の実態に応じて取り上げることができる。これからは、学校教育の中におけるハンドボールの良さと楽しさの理解をさらに深めて多くの生徒が選択することができるように努力することが必要である。また、ハンドボールの指導に当たる教師の指導力の向上を図ることも必要である。さらに特別活動の一つであるクラブ活動の部活動代替も可能となるので、教科体育の中でのハンドボールの指導と併せて、部活動としての「ハンドボール部」の活動が重要なものとなるので、ハンドボール部の振興発展も重大な課題である。指導行政担当の一人としてこれらの課題について努力していきたいと考えている。

すべての学校でのハンドボールの実施とオリンピック大会での優勝に思いを込めて、今後の発展をさらに祈ります。

無からの出発

高橋満年

昭和23年新居浜工業高校ハンドボール部が創部。創部当時の社会は敗戦後の混迷状態から未だ立ち直れず、すべてに乏しい時代であった。ともすれば目標さえ見失いがちな暗土の中を、互いにハンドボール競技を通じて明るさを見い出そうと努めていた。

当時、愛媛県下にハンドボール部は無く、先進県の香川へ出向き高松第一高等学校に練習試合をお願いし、夜は教室を借り筵をかぶって蚊の襲撃を防ぎつつ泊り、翌日3試合して帰るなどの練習を重ねていた。

第3回西日本大会に出場したく、生徒たちは合宿練習をしながらアルバイトをして部費を貯め、各家庭で下着のシャツを黒に染め試合用ユニフォームをつくり、米持参で大会に参加した（当時、米は配給制であった）。が、念願の西日本大会「西宮」では1回戦に敗れ、勝つことの難しさ厳しさを思い知らされたが、その試合経験は生かされ、基礎練習からのやり直しなど、闘志を燃やし練習に耐えていった。

その時のことである。初の西日本大会出場に生徒たちは意気揚々としてサッカーボールを提げて大会に臨み、初めて本物のハンドボール球を見て唖然となった。帰路全員で金を出し合いボールを買ったなど今では考えられないような、新居浜にハンドボール球のない時代の出来事であった。

そのうち愛媛県にもハンドボール協会ができ、第1回全国高等学校選手権大会県予選会が開催され、新居浜工業高校、松山東高校、今治西高校の3校リーグ戦の結果、新居浜工業高校は2勝を挙げ全国大会出場権を獲得した。

が、学校に遠征費が無くやむを得ず出場辞退となった時、この日までの練習に耐えた生徒たちの口惜しさを思い、共に涙したことを思い出す。

こうした創部時の苦闘に堪え抜いた先輩たちにより、しっかりとした基礎が作り上げられ25年の第5回国民体育大会四国予選に勝ち、初めて第5回名古屋国民体育大会に出場することができた。新居浜工業高校ハンドボール部にとって記念すべき年となったのである。

へばっても、へばっても、なお立ち上がる気力を持ち続け、激しい練習を積み重ねた先輩たち故に後輩の全国大会出場となると心からの援助をし励ましをおくる。その先輩たちを手本に後輩たちもまた「決勝進出」を合言葉に、それぞれの工夫を加え、益々厳しい練習を重ね着実に伝統を築き上げていった。

その努力の報われる日が来た。

昭和45年8月3日、彦根総合グランドに於ける第21回全国高等学校選手権大会に於いて、大阪枚方高等学校との決勝戦、9対8で優勝した。

初戦からどの試合も息詰まるような接戦であり、特に準々決勝、準決勝、決勝戦の3試合は実力伯仲の戦いであったが、日頃練習時に叩き込まれた「ラスト3分頑張れ」の精神力が勝利を挙げたのである。

本当に長い道であった。素足でグラウンドを走り回った創部以来23年目の初優勝である。全試合走り切る体力づくりと、どんな接戦にも得点するための何10回の反復練習にも耐え抜いた各代の部員一人一人の重みを思い、感動を味わいつつも、サッカーボールをひっさげて胸を張って大会に臨み、本物に出会ってからは持参したボールの持ち手が無くなったなどの遠い日々を懐しんでいる。

過去の思い出

藤田信義

日体専武道科の入試で得意の手榴弾投に70m近くの驚異的な記録を出して高嶋先輩に認められ、ハンドボール界に入る切っ掛けとなった。ポイントシューズをはいて110mのサッカーコートを11人で走り廻ってゲームに熱中した若き青春時代の思い出は忘れることはできない。戦後は母校の県立山口中学に奉職、21年、22年と県下を講習して初めて山口中学に部をつくった。その時の主将が西山逸成（防大教授）氏である。西山氏は25年山口大に入学、部を創立している。山口高が第1回インターハイに3位に入賞、その勢いに乗じ一般男子の山口クラブは活躍し、第7回国体の初の天覧試合に全東京を破り、田中龍夫県知事が感激の余りグランドに飛び出して固い握手をされた。8回で準優勝、10回国体で念願の優勝の栄冠を獲得した時の感激も忘れることはできない。

その後、38回山口国体より7人制になり、近森氏の居た徳山高が男女共優勝の偉業を成し遂げてより、下関中央工、岩国工、下松工等全国大会に優勝し、ハイレベルの県に成長した。私は26年山口大に転勤して36年勤務したが、学生界の発展に寄与し、山口大も平成2年8月創立40周年記念式典を行なった。在勤中は審判審査委員、学連審判長として歴任し、国際審判員として全日本—西ドイツ、全日本—スウェーデンのレフェリーをし、また初の日中交流の一環として中国遠征したことも私の生涯の思い出となった。

「現在の状況の分析」

現在の協会運営についてはいささか疑問をもつものである。現在が非常に重要な時期であり、全国の役員が一致団結して協力体制をつくり、アジア選手権に向かって全力を尽すべきである。次に海外遠征等についても必ずしも好成績とはいえない。この為の対策として「トレーニングの科学的処方」を今まで以上に研究に研究を重ね、選手の筋力、持久力、瞬発力の増強を図り、心、技、体、の心のトレーニングをも重要視する必要がある。ジュニア層を含めて、海外遠征等に対する多額の個人負担を軽減すべきである。選手に困惑心を与えるようでは実力は発揮できない。次に「マスコミ対策に遅れをとっている」。これは、強力な全日本が好成績をあげれば関心も高まり、マスコミも黙ってはいないと推察する。しかし、この対策は非常に重要であり、全力を挙げて対策の捻出を切望する。

「未来への提案」

1990年代はハンドボールを「如何にメジャースポーツ化」させるかにある。その為にはまずアジア選手権に優勝し、オリンピックで入賞できる強力な全日本をつくり上げることである。そうなると、マスコミも動き、世間の関心も高まり、次代の青少年層も生まれてくると確信する。如何にして強力な全日本を作製するか、これにはまず外国より有名コーチを招聘して世界に通用する作戦、戦術を研究すること、海外遠征をジュニアも含めて実施し、豊富な経験を体得させること、そして有望若手選手の発掘育成が必要である。

次に将来の普及発達について提案する。まず小学生対策である。それにはまず指導者の育成が急務であり、楽しみながら技術を覚えさせる方法、小さなコートで面白いハンドボールを体得させては如何であろう。そしてゲームを楽しむ習慣を習得することにより興味も増して技術も覚えてくることと信ずる。次に中学、高校の普及発展について、現在授業でも実施していない学校が如何に多いことか。この為には指導者の養成講習を県教委等主催で実施してハンドボールの良さをよりよく認知さすべきである。

次にレフェリー部門の増々の発展を図り、国際審判を養成してオリンピック等にも参加できる体制を獲得してほしい。

ふたむかし前の「ハンドボール」

藤本　強

十年一昔というから、私が「ハンドボール」の編集に携わっていたのは、もうふたむかしも前のことになる。杉山茂さんと2人で編集をしていたのは、1967～1972年度までの6年間のことであった。「ハンドボール」が季刊から月刊に変わって3年目からのことである。

この6年間実にいろいろのことがあった。協会創立30周年、念願のミュンヘン・オリンピック初出場など当時のハンドボール界にとって明るい話題もあった反面、女子世界選手権出場申込みミス、それをキッカケにしての鈴木会長辞職などの芳しくない事もあった。この世界選手権を東西世界の対立の狭間に流会になるなど、今日の

政治情勢からは考えられないような事も起きた。

　こうしたなかにあって、「ハンドボール」は二つの性格を合わせもっていた。一つはそのころのハンドボール界の唯一のハンドボールの専門誌としてのものであり、他方では、日本ハンドボール協会の広報誌としてのものである。この両者をどのようにして調和させていくかが一つの大きな問題であった。

　また日本ハンドボール協会の施策の両輪でなければならない「強化」と「普及」、ともすれば二者択一のように取り上げられる両者の間の関係の調和を紙面の上でどうするかも大きな課題であった。

　『オリンピック初出場』、これが当時のハンドボール界にとって最大のキャッチ・フレーズであったが、それにむけての海外遠征、長期の強化合宿、これまでにない強化策が採られるなかで、ともすれば「普及」の面がおろそかになりがちな当時、全国の全チームが読者である「ハンドボール」ができることはないか考えることもしばしばであった。

　こうした情勢を受け、種々の状況を考慮して、編集の基本方針というような大袈裟なものではないが、考えていたのは、頂点強化の一環として、外国の状況はできるかぎり多く盛り込む、特に諸外国のトップ・プレーヤーの名前、特徴などを採りあげる。外国の文献を各チームが利用しやすい形で紹介する。国内にあっては、地方の大会の記録をできるかぎり紙面で報道する。特に全国大会の予選は細大漏らさず採りあげるようにする。このようにして全国どのようなチームにも何らかの形で、情報という形で還元するような雑誌にしたいということであった。

　外国の情報は、杉山茂さんがNHKという報道機関に所属していたことでかなり果たすことができた。また、ハンドボール協会に送られてくる西ドイツの週刊ハンドボール専門誌『ハンドバル・ヴォッヘ』、国際ハンドボール連盟からの広報紙を利用することによってかなり盛り込むことができたと自負している。

　国内の各種大会のものはやはり杉山さんの所属と努力によることが多かったが、それぞれの地方の連盟の役員の方々の協力が何よりも有難かった。また、当時の全日本チームの監督であった村田さんの記事、大阪の光嶋さんの写真など多くの方々の積極的な協力も忘れることができない。

　こうした方々の積極的な協力があってはじめてできた雑誌であった。あらためてこうした皆さんの協力に感謝したい。

　外国の情報、国内の諸大会の記事、戦略面・戦術面・練習内容などの紹介、これを三本の柱として紙面を構成して、協会の広報紙としての性格をなるべく薄め、多くの読者に親しまれる紙面にすることを必掛けていた。こうした意図が十分に果たせたかどうかはわからない。しかし、努力はしたつもりである。

　いざ実際に編集をしてみると、月刊で雑誌を出すことがいかに忙しいことなのかあらためて思い知ることになった。

　当時、雑誌の印刷を頼んでいたのは、池袋の近くにあった高橋活版という印刷屋さんであった。毎月、ここで夕方から杉山さんと2人で出張校正をし、その月の雑誌を作り終る。すぐに来月号の編集プランをその場で考え、それぞれが担当できるものを分担する。

　できたものから次々に印刷に回し、足りないものは補っていく。

　記事だけでなく、写真も必要である。少なくとも表紙には質の良い写真が必要であるし、紙面のなかには、その状況がよくわかる写真が必要である。各種の大会があり、多くの写真が手に入る季節はいいが、大会のない月にはこれが頭の痛いことになる。種々の大会に写真を撮りに行くこともしばしばあった。こうしたなかで、多くの方々と交流を深めることができた。多くの知人ができたのも「ハンドボール」の編集に関わってきたからである。

　杉山さんも私も他に勤務を持ちながらの月刊誌づくり、普通の時にも時間のやりくりでかなり苦労を強いられた。ましてそれが、お互いに長期の出張で、東京に居ないこともある。こうした時の大変なことといったらない。印刷も現在の印刷と違い、一字一字活字を拾う本格的な活版印刷であり、時間もはるかにかかった。私個人にとっても、大学でもっとも大きな事件のあった時にもあたっており、数多くの思いがある時期である。

　忙しかったが、将来への大きな夢がハンドボール界をおおっていた頃である。その一翼を担っているという考えが強かった。今になってみれば、すべてが遠き、良き想い出である。

　ハンドボール界の将来とともに私が一時期関係した「ハンドボール」もより一層成長することを心から願って、関係者の努力を期待したい。

山梨県ハンドボール協会の回顧

古屋　正

　山梨県ハンドボール協会の創立は、昭和22年12月であった。爾来40数年同協会と歩んで来た筆者にとって、思い出は尽きない。

　戦後の窮乏と混冥のなかで、スポーツ復興への兆しは見られたものの、未知不毛の地に新スポーツを育成することは並大抵ではなかった。まず山梨師範と山梨青年師範の男子部と女子部にハンドボール部を新設して練習を開始し、県下に同好者を求めて役員を委嘱し、ルールブックと首っ引きで全県的な講習会を重ね、ハンドボール競技の普及と啓蒙に努めた。

　昭和23年10月、久留米市（福岡）で開催された第3回国民体育大会に初陣の山梨師範女子チームは、女子学生の部で優勝し、さらにこのチームは帰途、一宮市（愛知）で開催された全国師範・青年師範大会において、山梨青年師範男子チームと共に男女の部を制覇し、協会の発足に輝やかしい花を添えた。

　当時の山梨師範女子チームは常勝の実力を備え、同チームのOGを主力とした「全山梨」は、全日本選手権大会女子の部で、第1回から第5回頃まで優勝または上位成績を収め、山梨県ハンドボールの名声を全国に高めた。

協会創立後間もない昭和24年10月に、第4回国民体育大会関東予選大会を甲府で、さらに昭和29年8月に、第5回全日本選手権大会を富士吉田市で開催し、越えて昭和31年9月に、高松宮殿下台覧の下に、当時世界無敵のドイツチームとの国際親善試合を甲府に誘致したことは、いずれも協会の組織の強化とハンドボール競技の普及と発展を企図した結果であった。また、当時の主要大会には、その後日本協会の指導者となった荒川、高嶋、徳永、入江、安藤、松本などの諸氏が、現役の選手として活躍していたことを思えば、まことに今昔の感に堪えない。

昭和32年よりハンドボール競技の女子の部は、11人制より7人制に改められた。

昭和24年の学制の改革により、従来山梨県ハンドボールの基盤となって活躍した山梨師範・山梨青年師範は廃校となり、その後は伝統を継ぐ新制高校の活躍を中心とする時代となった。新制高校ではときに消長はあったが、男子は日川高校、甲府工業高校、塩山商業高校などが、女子は山梨高校、日川高校などがそれぞれ県内の王座を占めていた。対外的には昭和32年7月、足利市（栃木）で開催された第3回関東高校選手権大会で、男子の日川高校と女子の山梨高校がアベック優勝を遂げたこと、また昭和57年8月、隼人町（鹿児島）で開催された全国高校総合体育大会の女子の部で日川高校が優勝したことは、いずれも特筆すべき快挙であった。

この間成人男子では、昭和40年代には塩山クラブが、50年代には日川クラブが、それぞれ全日本クラブ選手権大会などで活躍し、女子では昭和59年に実業団チームとしてシャトレーゼが誕生し、現在日本リーグで注目すべき活躍を続けている。

思い出の最高にして最新なのは、昭和61年10月に山梨県で開催された、第41回国民体育大会「かいじ国体」での偉業である。この大会で山梨は、成人男女4位、少年男子3位、少年女子準優勝と健闘し、男女総合1位、女子総合1位の快挙を遂げ、天皇杯477・5点、皇后杯256・5点の偉業達成に、その一翼を荷なうことができた。

現在山梨県のハンドボールは、「かいじ国体」を契機とする新しい飛躍に向かって、逞ましい前進を続けている。

初の海外遠征・こぼれ話

松本重雄

横断幕・のぼり、旗々の羽田出発

当時、全員借金だらけの出発

当時の国際線発着は羽田空港からであり、海外に行くこと自身珍らしく大事業だったことは確かである。全員喜びはともかく、悲壮感も漂う出発であったが、各自の名前を書いた各様の横断幕やのぼりそして旗などが振られ、万才の掛け声とともに見送りを受けた。今では考えられないてれくささを味わった。

当時1ドル365円の頃、1人60万円（現数百万円）の支出は、それぞれ無理をした金額だったのだ。私など、父親に借金し、今だに半分も返金していない。もっともその父も遠く他界しており、ただ冥福を祈るのみだ。

気流と霧の関係で約2時間早くパリ空港に着いた孤独な集団、トイレから数人出て来ないのに驚いた。それは換金前であり小銭がなく、チップを払えず困っていたのだ。1ドル札を払って全員救いだす笑えぬ話もあった。

初めての7人制試合

5人攻撃1人防御

ドイツスポーツ百年友好使節団

当時、不十分な郵便物の解釈から欧州では全部7人制に切り換えたことを現地で知り、11人制の選手構成で遠征した我々は、初戦から戸惑ったゲーム展開を演じた。5人攻撃1人防御の我がチームに「なぜ1人残っているのか、6人攻撃6人防御は常識だぜ」と指摘される内容だったわけだ。これが現在7人制の隆盛を見ている昔話だったのだ。

世界選手権でルーマニア、チェコに完敗したが、西ドイツ連盟の好意で、予選後も選手村に宿泊し、試合見学ができたことは大へん幸せであり、かつ非常に勉強になった。

日独スポーツ百年友好使節の名目をもらっていたためか、日本大使館で大歓迎を受けた。刺身、ホーレン草、かつぶし、たくわん、梅干、のり、にぎりめし等、日本食を半ばあきらめていた我々、中には地獄に仏と涙ポロポロで食べた者もあったやに聞いている。

再びフランスへ

夕食会・式場会長の思い出

世界選手権後、ドイツ、チェコを転戦、再びフランスで友好を深めるため再入国した。フランス料理の夕食会は何んと苦痛だったことか。約3時間の間合い、ひとつの料理が来るのに約30分、大いにまいったものだ。それはワインは

一杯だけと監督の指示もあったが、アペックの相手チーム、チョンガーの我がチーム、はじめは知った限りの挨拶用語を酷使したとしても、また、顔を見合わせてにっこりしたとしても長い間が持つわけがなかろう。

今は亡き式場会長は大へん博識であり、旅行中に芸術、風俗、国際情報について多くの有意義なお話しを聞かせていただき感謝している。

イスラエル遠征（11人制）
モーゼの十戒・国づくり

今回遠征の最後にイスラエルに入ったのは日本人として珍らしいことで、イスラエル建国のイデオロギーに感動し、キブツ（集団農場）や隣接国との国際情勢について大へん勉強になった。我々の訪れた期間はモーゼの苦難を偲ぶ週間だったので、パン食禁止で大きなクラッカーで節食している期間をよいことに、米飯をたっぷり満喫した。おまけに大洋漁業からマグロ１匹の寄贈を受け、まるでマグロ週間だった。11人制は日本の完勝。

まとめ

何ごとも初めての経験であったが、現在の試金石として幾分か役立ったと全員誇りをもっていえるだろう。

審判エッセイ

光島磯雄

一流とされているレフェリーとそうでないレフェリーの相違については誰でも常に大きな興味と関心あるトピックとしての価値をみとめることである。

今までに日本に来て吹いた外国のレフェリーや海外遠征に参加した諸氏が体験見聞したレフェリー、日本国内での各種大会でのレフェリーについての感想にはさまざまのものがあろう。もちろんのこと、ゲームレベルによって、あるいはチームレベルによってプレーヤーやコーチのやり方とかルールの理解程度などにも差があるのは否定できないし、また、レフェリーの判定基準も全く同じものではなかったはずである。不撤底で片手落ちなジャッジや、見のがしとか見そこない状況も見られたはずである。そしてまた、同じペアでもゲームによってはまるで違う吹笛内容ともなるし、プレーヤーやコーチのエキサイトに捲き込まれてしまう場面もあったと思われる。先頃来日した西独のホフマン・プラウゼ組はＩＨＦのトップレフェリーペア（ゴールドワッペン）だが、気になる吹笛が皆無だったとは言い難い。しかしそれでも何かが違う!! 共通して我々が見習うべきことは、ゲームコントロールの適切さである。つまりゲーム全体を一つの流れとして演出する能力に格段の相違を認めることである。以下私見であるが要点を記してみる。

理念に反する行為には極めて厳格である。

試合の流れが停滞するとか、危険なプレー、アンフェアなプレーが単独か相互に関連してゲームコントロールの障害となる事例には常に厳格でなければならず、これらの予防につながるジャッジがゲームコントロール能力（試合管制能力）の最大の要素である。換言すれば「意図的にアンフェア行為をするプレーヤーやチーム関係者に対しては必ず罰する」という信念を示すことである。このことは、放置すれば次第にエスカレートを招き、時としては重大な結果になることへの予防措置になる。いずれもルールの意図、すなわちボールを対象としない相手の身体への反則行為の完全な理解が必須の条件である。

ポジショニング（位置どり）、接近プレーへの神経集中力の問題

誰でもわかっていることだが、反則を見のがすとかアドバンテージ適用のまずさの原因は、その多くがポジショニングの悪さにあることを再認識すべきである。センターラインからフリースローラインまでの間の動きの多様さが合理的であれば、従来吹きすぎていたことや、吹きたらなかったことなどが新たに理解できるはずである。

プレーヤーのボールコントロールが続いている状況を観察しながらの気くばりこそゲームコントロール（アドバンテージ）の真髄と考える。レフェリーの意図がプレーヤーに十分に伝わる動きと吹笛（コミュニケーション）こそ一流レフェリーが必らず備えている能力であり、それが良い意味でプレーヤーへフィードバックされ、プレッシャーとなるべきである。

アドバンテージ適用は状況を読んでできるだけ長くしてはどうか

この件こそレフェリーの個人差が最も端的にあらわれることである。レフェリー教育の基本は常にこの件の地域差、個人差の解消を目指したスローガンになっていることである。この場合、レフェリーは意図的に反則を見のがす場面があらわれるが、現在の我々の身のまわりでは些細な現象の取り締まりでフリースローの連続による中断が多発する傾向が一般的である。試合の山場、見せ場をプレーヤーにもつくりやすくするとともに、観衆にも理解させ、楽しませる気くばりをはたらかせなければ、ハンドボール自体がオモシロサを失なうにいたるであろう。

ゲームコントロール能力について

ゲームコントロールとは、ルールの意図することの完全な理解、ゲームの先読み能力、ポジショニング、アドバンテージ適用能力などの要素の積み重ねであり、しかもこれらはリズム、タイミング、気くばりといった客観的に対比したり立証したりすることのできない各種の方向線（並行、交錯、反行状態）で形成される。これこそゲーム経験の多寡による差、ゲーム内容の質的な差から日本やアジア諸国のレフェリーにとって常に古くて新しい問題である。

ゲームコントロール能力の養成はつまるところレフェリー経験を多く積み、個々の担当ゲームで目標をたてて向上につとめるしかないのである。レフェリー技術は経験でしか得られぬことが大部分を占める。たとえば、笛の音量についても反則の種類や状態によって

強弱長短の変化をつけることが推奨されているように、笛をコミュニケーションの道具にする技術は実際に行動で経験しなければ身につくことではない。

初心、未熟のうちは反則を見のがすまいとの意識過剰なあまりアドバンテージ適用範囲を規制する傾向もみられるが、これは一日も早く脱却する進歩がのぞまれる。ただレフェリーの差をなくそうとすることがルールの理解とかフィットネスの完璧さを求めるあまり、極端な画一方向に進みはしないかという一種矛盾した疑問にもつきあたるが。ゼスチュアやシグナルにしてもそれぞれ個性があるのも現実であり、コアの部分以外はこだわっていない現象を否定していないのがインターナショナルでもある。

結びとして

レフェリーのレベルアップとして評価についての資質向上には、何をおいても一流の現場をより多く見ることが早道であり、レフェリー諸氏は一流を見る、現場に参加する、海外研修の機会をとらえて参加するなど考えてはいかがなものか。

日本のレフェリーの海外での評価は決して低いものではない。ただそのバックグラウンド、ヒンターランドとも言うべき土壌の上で常にオクタン価の低いガソリンで走っているような環境の改善が進められれば、ワールドレベルへの吹笛参加は決して遠い夢ではないと断言する次第である。

ハンドボールの過去・現在・未来

望月伸三郎

「過去の思い出」

私が、昭和23年の高校1年からハンドボールを始めて、自分が試合にプレーしなくなったのは昭和43～45年頃だと思う。指導者としてのハンドボールは昭和30年に教師となって現在までの35年間。選手としての私は恵まれていた。全日本大会3回、国体2回の優勝経験は、サッカーと同じ大きさだった。7人制の競技では、第1回の大阪大会と国体の教員の部と全日本教職員大会に優勝したことである。指導者としてはインターハイに監督で5回、近畿大会の優勝2回の経験があります。これは前任者の遺産で自分でチームを育てたという自信はありません。それで自分なりに感じたことは、選手の自分はどんなに辛いことにも耐えるが技術の追求、作戦の研究など積極性に欠け、受け身の練習だった。指導者としては誰もが指導できる段階と個性的な指導の限界を知った。世界の人口53億の頂点を目指すには、選手は受け身であってはならないし、指導者は科学的知識を十分に持った個性的指導でなければ勝てない。要するに選手としての能力と指導者としての能力は別の要素だと知った。

「現在の状況分析」

現在の日本ナショナルチーム男女とも過去の成績より低迷している。その原因はゲーム中のプレーヤーの動きの少なさが一番のポイントであろう。それと基礎体力の不足です。ソウル・オリンピック韓国チーム男女とも体格の劣勢を走りと瞬発力、敏捷性でカバーしての成績であると誰もが認めている。かつてインターハイ会場の体力測定で戦績上位を占めたのは関東、九州地区のチーム、体格の大きい東北、北海道地区は低位の戦績であった、と形態と機能の相関を調べ報告した。体格は遺伝であるが、機能はトレーニングで向上する。国際的な対応はトレーニングのプログラムとその遂行である。

「未来への提案」

日本の少年サッカーチームは世界一強いといわれるが、オリンピックではアジア予選にも勝てない。バレーもハンドも下降している。

ニュージーランドのラグビーチームは世界一強いが、シーズンは4～9月の半年で、あと半年はバスケットをやったりマリンスポーツをして体を鍛えている。アメリカのプロ野球選手にはアメフトやバスケット選手が多いし、ヨーロッパではタレントの発掘からナショナル選手への指導が確立されている。日本のスポーツ指導者には、オールラウンドな体力づくりと技術の練磨、科学的指導が遅れている。中学・高校・大学で優勝することは大切な要素であるが、ナショナルに伸びるためには勝利を諦めることもあろう。ヨーロッパのナショナルの指導者は2千時間ぐらいの学習成績とチーム指導の実績で資格が与えられる。資格がないと指導できない。日本のハンドボールは全日本大会で優勝すればナショナルの指導者となれる。良い選手に恵まれたチームの監督であった為に指導はなくともナショナルの監督になることもある。タレントの発掘を如何にナショナルにつなげるかの指導組織の確立。そのためには、ジュニア・シニア・ナショナルの指導者の資格と養成は急務である。

指導者には監督、体力づくり、技術指導、トレーナー・スポーツドクターなどそれぞれのスペシャリストを協会はどのようにコーディネイトするかが頂点の対策として大切だろう。

思い出

山田　計

日本ハンドボール協会機関誌「ハンドボール」が300号の発行を迎えられたこと、心よりお喜び申し上げます。機関誌に携われた関係の方々のご苦労に感謝致しますとともに今後の発展を期待するものです。

昭和14年ハンドボールを知り、選手として、また審判を行なってまいりました。学生時代日本送球協会発足、また東亜競技大会が昭和15年6月、関東大会、関西大会（奈良）が行なわれ、日本代表の一員として参加しました。対戦チ

ームは在日ドイツ人チームで、試合結果は日本チームの2勝でした。

その後、戦争の為昭和21年まで海外にいて、同年11月大阪府に就職と共に大阪ハンドボール協会高体連の役員として普及発展の為、小学、中学、高校、大学、並びに他府県に指導に走り廻り、昭和24年より47年まで日本ハンドボール協会理事として、48年より評議員として現在に至っています。

その間第1回高等学校選手権大会(於藤井寺)はじめ7人制室内大会(大阪府立体育館)、全日本教職員連盟設立等いろいろな思い出があります。

特に1969年(昭和44年)、故田村会長、故渡辺副会長に呼ばれ、国際ハンドボール連盟の審判講習会に出席せよとのことでした。細部について故渡辺副会長より説明がありました。その内容を簡単に記すと、日時は1969年6月、場所はスペイン(マドリッド)、参加者は各国2~4名。ただアジア地区では経験者が少ないし日本が1番発展しているので君に白羽の矢が立ったので1人で行けとのこと。海外遠征は1962年11月、日韓高校第1回と第3回の韓国遠征だけで今度の出張は心細さを感じました。

6月東京羽田空港にて故渡辺副会長の見送りを受け、エールフランス機南廻りパリ行に乗りましたが、座席の左右はドイツ婦人とフランス婦人で英語は片言となるの通じず、ハンドブックで何んとかスチュワーデスに助けをかりパリに着き、長い時間のように感じました。パリでは、スケジュール表(国際連盟よりのもの)により7日間滞在中2試合の審判を行うよう、日時、場所、チーム名、もう1人の審判員が記してあり、知らない所での行動は不安だらけでしたが、なんとかできた。その次はローマへ行きパリと同じスケジュールで2試合審判を行いパリに引き返しスペインに出発。スペイン(マドリッド)空港には当国の理事長他5名通訳の出迎えを受け、ホッとし心強く思った。宿泊は全講習者は大学の寮で私は1人部屋。講習は午前9時より11時まで学課、午後は4時より8時頃まで試合形式による技術を主体にしたもので、2日に1回の審判が割当てられた。私はアジアから1人の為毎回相手が変わり、言葉の点で大いに気をつかった。25日間でしたが5日ごとにレクリエーションがあり、セロビヤ地方の見闘牛や踊、市内見学等が行なわれ、終了パーティーは市内公園内で午後2時より行なわれたが、セレモニーが始まったのが午後6時頃でした。国際連盟会長ハンス・ハンマン氏、主事アルベルト・クブナ氏、他20人程の役員が並び、会長より今から合格者に国際審判員証を渡す説明があり1番最初に日本山田と呼ばれ、とまどいながら受取る感謝でした。午前2時頃レセプションが終了、よく頑張ったものだと思う。

その後、ユーゴで「タシマイダン杯」の大会があり、全日本男子チームも出場するので合流せよ、とのこと。また、大会の審判をすることになっていたので村田監督以下チーム面々にお会いしてうれしいやらなつかしいやらで胸いっぱいになりました。帰りはまた1人北回りで帰国す。

夏の強化を願って

渡辺慶寿

1960年5月に機関誌が刊行され、この8月号で実通算300号を迎えるとのこと、歴代から機関誌の編集を担当された方々のご苦労と熱意、そして努力を中心より稿うものです。

私が初めて日本ハンドボール協会の仕事をしたのが、1971年当時普及部を担当しておりました。委員会のメンバーはハンドボール普及をどのようにしたらよいかが、当然のことながら話題の中心で結局原点に戻り、基礎技術、指導体系をまとめ、冊子を作成したのが最初の仕事でした。これは広く指導者、選手たちに役立てるもので日本協会が初めて公認したものです。夜を撤しての委員の皆様の熱の入れようは、想い出の一つとなっております。

その後1975年に技術部に包含されておりました強化に関します活動を独立させ強化部をつくり、これが現在の強化のシステムの原型となったといえます。いうまでもなく強化の仕事は、国内外での強化あるいは国際試合、そして最重点目標のオリンピック出場など、直接、間接にも日本チームを強くすることにあります。しかしその目標達成は容易なことではありません。

真の強化は、日本協会が責任をもって行なう必要があると日頃思っております。特に資金面においては、十分に考慮すべきです。その基盤を是非つくって欲しいと願っております。

強化は時間との戦いです。次の大会の準備を怠るわけにはまいりません。所詮現場の指導者、選手たちに努力を強要させることになり、その強要は技術、戦術へと目を向ける結果となります。戦術といえばソウル・オリンピックで用いたディフェンスシフトは、期待されるものがありました。防御技術の徹底は、これからの戦術の盲点であるのかも知れません。防御技術の徹底からの攻撃展開は、一層ハンドボールの魅力を増すことになると考えます。なぜならば攻撃展開を速くするからです。

近代スポーツは技術、戦術だけでは、相手に太刀打ちできない様相となってきています。すなわち戦略が必要です。戦略とは、相手に勝つために合理的に対処する技能といえます。栄養面、体力、心の問題(先般男子ナショナルチームが自衛隊で行なった訓練はよい成果を挙げることでしょう)、そして分析等の総合された働きかけが必要となります。長期的には、チームの内面的育成計画、外面的には、今後戦うであろう相手チームを意識しての体力、技術、精神的条件、広くは地理、環境条件をも加味した計画実施が要求されてきます。このような要件を満たすためには、個人のレベルでは甚だ困難であり、多方面からの有識者の力に委ねることとなります。

現場の監督やコーチあるいは選手たちが日頃努力している背景を一層実り豊かにするためには、日本協会全体の強化に対して理解と実行がハンドボールのより一層の普及へとつながるものと確信しています。

日本協会発足の頃

外山准二

昭和13年2月2日、日本ハンドボール協会は正式にIHFに対し、日本の代表権を日本陸上競技連盟から譲り受け発足したことはご承知のことと思います。

当時私は、慶応義塾大学の1年生で、その1年前、予科生で日吉に通っていた時に、初めてハンドボールとの関係ができ、部員を集め、ルールブック片手にハンドボールをやっておりました。

勿論協会設立準備は、陸連を中心に着々と進められており、駿河台の佐藤新興生活館ビルに仮事務所がおかれ、中園進氏を中心に動き始めておりました。私も阿部二郎氏と共に幹事の名でお手伝いを始めました。

そのお手伝のスタートが、協会発足の日に行われました。

1936年ベルリン・オリンピックの次に予定されていた1940年東京大会のために、ドイツにより技術顧問として来日しておられたクリンゲンベルグ氏がドイツへ帰国されることになり、同氏に托す日本の代表権の譲渡による協会発足の正式文書を準備することでした。文案はすでに決定されていたのですが、これを英、独二国語に飜訳したした文書をつくることでした。

英文はすでにできていたのですが、独文のものは、飜訳された方が病気で遅れ、それを受け取って、タイプしなければならない訳です。中園氏より右の旨を開き、協会で用意した車で至急、会場に持ち帰って欲しいとのことでした。

書類をお預りして車に乗り、まず独文に飜訳をお願いした方の自宅に向い、書類をお預りし、当時の電通の一室にあったUP特派員の事務所に行って、タイプをお願いした次第です。タイプの打ち上るのを待って、会場の赤坂幸楽に持ち帰り、中園氏にお渡ししました。

どのくらい時間がかかったのか？ 独文の原稿はどこへ取りに行ったのかは、よく憶えていませんが、借り上げた車でとびまわったことは、よく憶えております。

会場で、早速、平沼先生のサインを頂いて無事クリンゲンベルブ氏にお返ししてIHFに届けて頂いた次第です。

書類は、英、独両文それぞれ四通あったと思います。

独文に飜訳して頂いたのは、慶応義塾大学の独語専門の先生で、お名前は失念しましたが、非常に神経質の方だったようで、玄関まで出て来られたのですが、病気をうつすと悪いから―とマスクをしておられました。

その後、塾を卒業と同時に理事に任命され協会の仕事に積極的にお手伝いをして参りました。

平沼先生が、ハンドボール協会会長に就任されてから、『自分がやったスポーツの会長を引き受けることにしている。ハンドボールはまったく知らないので一度家に来ておしえて欲しいとのことで、塾の部員2、3名つれて横浜のお宅に伺い、お庭でいろいろご披露したあと中華街で夕飯をご馳走になったことも忘れられないことでした。

機関誌・ハンドボール「300号」のあゆみ①

機関誌「ハンドボール」も今号で300号を迎えました。その特別企画として第1号からの主要目次を紹介させていただきます。今回は第1回として、第1号から第100号までを掲載いたします。

▼第1号（1960年6月）
・巻頭言／会長、式場隆三郎
・高嶋理事長と一問一答
・東京オリンピックへの選手強化対策方針／荒川清美
・第6回全日本総合室内選手権
・地方だより、楽書帳・鮎沢周太、東西学生春季リーグ中間展望、昭和34年度主要大会成績総覧、協会だより

▼第2号（1960年7月）
・巻頭言／ヴァシレ・ツードル談（来朝ルーマニア選抜軍団長）
・好転するか五輪ハンドボール―東京五輪組織委21種目実施を確認―
・ルーマニア選抜軍との国際試合
・盛夏に競う大学、高校の王座
・第12回全日本総合選手権の話題を拾う
・学生春季リーグ戦、地方だより、高校生のためのハンドボール①／岡村昭二、中学校に於けるハンドボールの指導①／山岡二郎、協会だより

▼第3号（1960年10月）
・巻頭言／高嶋 冽
・再び楽観許せぬ事態に―東京五輪ハンドボール―
・日本・ルーマニア　東日本シリーズ観戦記／小川励行
・国際試合をかえりみて／荒川清美
・第12回全日本総合選手権観戦記
・第3回全日本学生選手権観戦記
・第11回全日本高校選手権
・第3回全日本教職員選手権
・地方だより、高校生のためのハンドボール②、中学校に於けるハンドボールの指導②、協会だより

▼第4号（1960年12月）
・巻頭言／無署名
・特集／爽秋のハンドボール界に拾う七つの話題
・第15回国民体育大会
・第4回全日本学生秋季リーグ戦、第10回学生選抜東西対抗、関西学生秋季リーグ戦、東海学生選手権、
・ルーマニアチームの科学的分析～雑誌「オリンピア」から～
・地方だより、協会だより

▼第5号（1961年2月）
・巻頭言／式場隆三郎
・第4回男子7人制世界選手権出場特集
・五輪ハンドボールの悲願成らず―JOC、18種目案を承認―
・第7回全日本総合室内選手権
・1960年度を回顧する／杉山茂、新シーズン学生界展望①／駒沢球治郎、地方だより、協会だより

▼第6号（1961年5月）
・巻頭言／高嶋 冽
・代表チームをねぎらう／的場益雄
・特集・第4回世界室内選手権大会記
・ヨーロッパ各地遠征試合記録
・遠征総まくり座談会／高嶋冽、松本重雄、近藤金博、竹野奉昭、鴛尾武治
・寄稿特集・日本ハンドボール界に注文
・特別寄稿・ハンドボールの前途／岡部平太
・新シーズン学生界展望②／駒沢球治郎、地方だより、協会だより

▼第7号（1961年10月）
・緊急特報・遺憾な約束破棄―東京オリンピック除外で国際ハンドボール協会公式声明―
・第13回全日本総合選手権
・ヨーロッパ遠征記①／高嶋 冽
・欧州における審判の方法①／荒川清美
・ハンドボール選手の基礎体力／広田公一
・第4回全日本学生選手権
・関東学生春季リーグ戦、関西学生春季リーグ戦、国立7大学、国体展望、学生界秋の展望、実業団球界の話題
・第12回全国高校選手権

▼第8号（1961年12月）
・1961年の回顧／高嶋 冽
・日韓親善国際ハンドボール
・座談会・韓国みたまま感じたまま／栗本義彦、荒川清美、的場益雄
・第16回秋田国民体育大会
・第5回全日本学生王座決定戦
・第11回全日本学生選抜東西対抗
・関東学生秋季リーグ戦、関西学生秋季リーグ戦
・1961年10大ニュース
・ヨーロッパ遠征記②、欧州における審判の方法②、技術研究室①・ポストプレー（攻撃）について／松本重雄
・ハンドボールのスポーツ傷害／広田公一

▼第9号（1962年3月）
・巻頭言／式場隆三郎
・高松宮妃殿下を囲んで／高松宮妃殿下、渡辺和美、三浦元秀、鴛尾武治
・ことしの抱負（アンケート1）
・11人制か7人制か（アンケート2）
・地方の声（アンケート3）
・第8回全日本総合室内選手権
・第2回実業団大会
・ヨーロッパ遠征記（最終回）
・欧州における審判の方法（完）

▼第10号（1962年6月）
・巻頭言／式場隆三郎
・女子世界選手権大会参加特集
・座談会・夢のチームでなぐりこみ／北川浩、宮原俊隆、塩川安賢、磯部昌子、古谷芳枝、西村八千代、山田帆浪、鴛尾武治
・関東学生春季リーグ戦、関西学生春季リーグ戦
・技術研究室③・7人制の選手交代について
・連載①ハンドボール球史
・ハンドボール選手の体力／広田公一

▼第11号（1962年11月）
・第2回世界女子選手権大会
・座談会／高嶋冽、北川浩、宮原俊隆、塩川安賢、西村八千代、

鷲尾武治。
・第14回全日本総合選手権大会
・第13回全国高校選手権大会
・第5回全日本学生選手権大会
・連載②ハンドボール球史
・第5回全日本教職員選手権大会

▼第12号（1962年12月）
・巻頭言／式場隆三郎
・国際情勢と欧州の近況／高嶋冽
・山口国体から全種目7人制／鷲尾武治
・7人制一本化に近づく／杉山茂
・学生選抜チーム欧州へ
・第17回国民体育大会
・全日本学生王座決定戦、全日本学生東西対抗
・関東学生、関西学生秋季リーグ
・連載③ハンドボール球史
・技術研究室（高校用）／松本重雄
・体育研究室　ハンドボール選手の体力――日本代表女子チームの体力について――／山本隆久

▼第13号（1963年3月）
・巻頭言／棚橋義輝
・7人制一本化に決まる～国体に教員の部が誕生～
・第1回世界学生選手大会
・国際試合
・欧州遠征リポート／渡辺一己、谷義信、藤原侑、荘木康次、市原則之、浅野和郎、坂井弘元
・1963年度を展望する／杉山茂
・第9回全日本総合室内選手権
・全日本選抜室内選手権大会
・第3回全日本実業団選手権大会
・体育研究室　ハンドボール選手の体力――全身反応時間について――／山本隆久
・技術研究室　7人制の技術的考察／松本重雄
・連載④ハンドボール球史

▼第14号（1963年7月）
・巻頭言／馬場太郎
・7人制日本縦断
・欧州の7人制を見て／渡辺一己
・技術研究室　誌上座談会・ゴールキーパー編／松本重雄、今野邦彦、福本弘、山田帆浪、篠崎益野
・関東、関西学生春季リーグ戦
・体育研究室　ハンドボール選手のトレーニング①／山本隆久
・連載⑤ハンドボール球史

▼第15号（1963年12月）
・巻頭言／渡辺和美
・世界選手権、日本はD組にシード
・第13回国際審判講習会／若崎重富、藤本強
・第15回全日本総合選手権大会
・体育研究室　ハンドボール選手のトレーニング②／山本隆久
・第6回全日本学生選手権大会
・第18回国民体育大会
・第6回全日本教職員選手権大会
・第14回全国高校選手権大会
・技術研究室　防御の研究について／遠藤健次
・日韓親善
・連載⑥ハンドボール球史

▼第17号（1964年6月）
・私の言葉／渡辺和美
・第5回7人制男子世界選手権
・日本・フランス国際親善試合
・1964年度の新勢力展望／杉山茂
・連載⑧ハンドボール球史

▼第18号（1964年11月）
・私の言葉／近藤禄郎
・日本・フランス国際親善試合
・座談会／フランス選手に聞く
・技術研究室　ハンドボール・からだづくり／若崎重富
・第19回国民体育大会
・第7回全日本学生選手権大会
・欧州遠征日誌から（上）
・連載⑨ハンドボール球史

▼第19号（1965年1月）
・私の言葉／山内清次
・女子7人制世界選手権大会、日本参加を申し込む
・欧州遠征日誌から（下）
・技術研究室　ハンドボール・からだづくり／若崎重富
・第16回全日本総合選手権大会
・第7回全日本教職員選手権大会
・第15回全国高校選手権大会
・関東、関西学生春季リーグ戦
・全日本学生東西対抗、全日本学生王座決定戦
・連載⑩ハンドボール球史

▼第20号（1965年3月）
・私の言葉／田村正衛
・第11回全日本実業団選手権
・第5回全日本総合室内選手権大会
・1964年度を顧りみて／若崎重富
・競技規則一部改正の要点／岡村昭二
・海外ジャーナル
・連載⑪ハンドボール球史

▼第21号（1965年4月）
・私の言葉／小坂幸一
・日本チーム、中国へ初遠征
・全国評議員会報告
・海外ジャーナル
・1965年の展望（上）／杉山茂
・第5回日独交歓試合
・体育研究室　M・M・P・Iによるハンドボール選手（女子）の性格について／山本隆久
・連載⑫ハンドボール球史

▼第22号（1965年3月）
・私の言葉／菊地慶一郎
・初の中国遠征、日本1勝8敗
・1965年の展望（下）／杉山茂
・田村紡を優勝に導くまで／宇津野年一
・ハンドボール少年団結成を望む／山岡二郎
・連載⑬ハンドボール球史

▼第23号（1965年6月）
・中国遠征の記
・私の言葉／武田兼治
・第3回女子7人制世界選手権大会組み合せ
・海外ジャーナル
・関東、関西学生春季リーグ戦
・連載⑭ハンドボール球史

▼第24号（1965年7月）
・私の言葉／田中丸善一郎
・第3回女子7人制世界選手権大会2回戦、チェコ、日本遠征を断わる
・海外ジャーナル
・全日本総合選手権大会展望／杉山茂
・第8回（女子第1回）全日本学生選手権大会
・連載⑮ハンドボール球史

▼第25号（1965年8月）
・私の言葉／中尾節次
・第16回全国高校選手権大会
・第6回男子7人制世界選手権大会に備えて／松本重雄
・海外ジャーナル
・連載⑯ハンドボール球史

▼第26号（1965年9月）
・私の言葉／増田　静
・第6回男子7人制世界選手権大会組み合せ
・第17回全日本総合選手権大会

・第8回全日本教職員選手権大会
・海外ジャーナル
・連載⑰ハンドボール球史

▼第27号（1965年10月）
・私の言葉／帆足久喜
・ハンドボール36年ぶりにオリンピック登場　IOC総会で正式決定
・第3回女子7人制世界選手権大会　栄えある代表16人
・ハンドボールと私――兵庫県立尼崎高校の歴史――中松正昭
・第20回国民体育大会組み合せ
・連載⑱ハンドボール球史

▼第28号（1965年11月）
・私の言葉／故式場隆郎（遺稿）
・第3回女子7人制世界選手権大会／日本、ポーランド破り7位
・第20回国民体育大会
・海外ジャーナル
・協会規約の改正とその意義
・関東学生秋季リーグ戦
・連載⑲ハンドボール球史

▼第29号（1965年12月）
・私の言葉／梶浦暲一
・式場さんの思い出／田畑政治
・第3回女子7人制世界選手権
・オリンピック特集・関係者の声
・海外ジーナル
・第18回全日本学生王座決定戦
・関西学生秋季リーグ戦
・第3回東京都選手権大会
・連載⑳ハンドボール球史

▼第30号（1966年1月）
・私の言葉／高嶋　冽
・第12回全日本選抜選手権大会
・女子ヨーロッパ遠征
・故式場会長の思い出／小田善一、近藤金博、馬場太郎、外山准二

▼第31号（1966年3月）
・私の言葉／野原敏彦
・日本協会評議員会
・第6回日本実業団選手権大会
・球界パトロール
・海外ジャーナル、海外スコープ

▼第32号（1966年5月）
・私の言葉／油谷外郷
・第6回男子7人制世界選手権大会組み合せ
・予算編成と決算報告について／加藤裕策
・41年度中央審判講習会
・1966年の展望（上）／杉山茂
・大谷武一先生を偲んで／外山准二
・西ドイツの技術研究(1)
・球界パトロール
・連載㉑ハンドボール球史

▼第33号（1966年6月）
・私の言葉／高田義一
・日本協会全国理事長会議
・目ざすは「ミュンヘン」　1972年の五輪開催地決まる
・1966年の展望（下）
・海外スコープ

・中国チームの分析／岡村昭二
・西ドイツの技術研究(2)
・ハンドボール球史㉒

▼第34号（1966年7月）
・私の言葉／米山　泉
・ことしのタイトルはもらった　関東、関西学生春季リーグ戦
・西ドイツの技術研究(3)
・学園だより
・連載㉓ハンドボール球史

▼第35号（1966年8月）
・私の言葉／藤間英一
・第17回全国高校選手権大会展望
・西ドイツの技術研究(4)
・高体連だより、学園だより
・連載㉔ハンドボール球史

▼第36号（1966年9月）
・私の言葉／三瓶勝治
・第6回男子7人制世界選手権大会日程
・第9回全日本学生選手権大会
・第17回全国高校選手権大会
・西ドイツの技術研究(5)
・学園だより
・連載㉕ハンドボール球史

▼第37号（1966年10月）
・私の言葉／渡部　保
・日中親善大会
・第18回全日本総合選手権大会
・学園だより
・連載㉖ハンドボール球史
・第21回国民体育大会組み合せ

▼第38号（1966年11月）
・私の言葉／木下弥三郎
・日中親善
・西ドイツの技術研究(6)
・学園だより
・連載㉗ハンドボール球史

▼第39号（1966年12月）
・私の言葉／近間忠一
・第21回国民体育大会
・関東学生秋季リーグ戦
・西ドイツの技術研究(7)
・学園だより
・連載㉘ハンドボール球史

▼第40号（1967年2月）
・私の言葉／堀内俊夫
・第6回男子7人制世界選手権
・第13回全日本選抜選手権大会
・第19回全日本学生王座決定戦
・東海学生秋季リーグ戦
・学園だより
・連載㉙ハンドボール球史

▼第41号（1967年3月）
・私の言葉／児玉九十
・第6回男子7人制世界選手権大会詳報
・第7回全日本実業団選手権大会
・日本協会に望む
・ことしの目標
・学園だより
・連載㉚ハンドボール球史

▼第42号（1967年5月）
・会長挨拶／鈴木達雄

・西ドイツチーム来日決る
・1967年を展望する(1)／杉山茂
・欧州遠征から得たもの
・西ドイツの技術研究(8)
・連載㉛ハンドボール球史

▼第43号（1967年6月）
・私の言葉／伊藤仁和
・各地の春の学生リーグ戦
・1967年を展望する(2)
・西ドイツの技術研究（最終回）
・新連載リレー寄稿・日本ハンドボール界の課題(1)／杉山茂
・学園だより
・連載㉜ハンドボール球史

▼第44号（1967年7月）
・私の言葉／多胡恒治
・全国理事会報告
・このようにして世界選手権を獲得した／チェコのコーチ、ベードリッヒ、ケーニッヒは語る
・フランスの技術研究(1)
・球界パトロール
・連載リレー寄稿・日本ハンドボール界の課題(2)／村田弘
・学園だより
・連載㉝ハンドボール球史

▼第45号（1967年8月）
・私の言葉／安藤純光
・第10回全日本学生選手権大会
・第18回全日本高校選手権大会組み合せ
・フランスの技術研究(2)

・世界ジュニア選手権より
・連載リレー寄稿　日本ハンドボール界の課題(3)／藤田信明
・学園だより
・連載㉞ハンドボール球史

▼**第46号（1967年9月）**
・私の言葉／徳中康満
・西ドイツチーム来日
・第19回全日本総合選手権速報
・フランスの技術研究(3)
・第18回全日本高校選手権大会
・第10回全日本教職員選手権大会
・全国スポーツ少年団大会
・学園だより
・連載㉟ハンドボール球史

▼**第47号（1967年10月）**
・私の言葉／平出　一
・日独国際親善東日本シリーズ
・フランスの技術研究(4)
・連載リレー寄稿　日本ハンドボール界の課題(4)／中西敬一
・第19回全日本総合選手権大会
・夏の全日本選手権回顧

▼**第48号（1967年11月）**
・私の言葉／ヘルム・トルカ談（西ドイツ選手団監督）
・日独国際試合、成功裡に終る
・特別座談会・日独戦を顧みて／荒川清美、中沢重夫、安藤純光、北村尚英、宇津野年一、勝繁夫
・フランスの技術研究(5)
・連載リレー寄稿・日本ハンドボール界の課題(5)／鶴岡久雄

▼**第49号（1967年12月）**
・私の言葉／馬場太郎
・第22回国民体育大会
・評議員会、理事会開かる
・連載リレー寄稿　日本ハンドボール界の課題(6)／辻　一義
・日本ハンドボール協会創始期の思い出(1)／松本良三
・各地学生秋季リーグ戦

▼**第50号（1968年2月）＝日本ハンドボール協会創立30周年記念号＝**
・日本ハンドボール協会30周年記念を祝す／石井光次郎
・日本協会の進むべき道／荒川清美
・当面する課題への対策
・日本ハンドボール界の足跡
・日本ハンドボール協会の歩んだ道～30年間の主な出来事～
・日本を訪れた外国チーム
・全国大会略史
・高体連、学連、実連、～その沿革と課題～
・日本ハンドボール協会創始期の思い出(2)／松本良三
・連載リレー寄稿　日本ハンドボール界の課題(7)／地方協会理事長特集
・第14回全日本選抜選手権

▼**第51号（1968年3月）**
・定例評議員会、理事会開催
・日本ハンドボール協会創立30周年記念行事開く

・第8回全日本実業団選手権
・競技規則改正の要点について／安藤純光
・新連載ハンドボールの歩み〈世界選手権編①〉
・日本ハンドボール協会創始期の思い出(3)／松本良三

▼**第52号（1968年4月）**
・1968年度の開幕にあたって～荒川理事と一問一答～
・新シーズンの有力チームを探る①――女子実業団の巻――
・1967年度を顧みて／若崎重富
・ルールのうつりかわり／安藤純光
・中学ハンドボールの現状と問題点
・フランスの技術研究(8)
・連載ハンドボールの歩み〈世界選手権②〉
・日本ハンドボール界規定集

▼**第53号（1968年5月）**
・第4回女子7人制世界選手権大会組み合せ決まる
・日本協会新組織の骨子まとまる
・新シリーズの有力チームを探る②／杉山茂
・新連載、技術教室①基礎とはなにか／村田弘
・フランスの技術研究(9)
・日本ハンドボール協会創始期の思い出(4)／松本良三
・連載・ハンドボールの歩み〈世界選手権編③〉
・国際ハンドボール連盟規程集

▼**第54号（1968年6月）**
・選手強化対策本部発足にあたって／荒川清美
・春の学生リーグ戦
・関東学連30周年を迎う
・日本ハンドボール協創始期の思い出(5)／松本良三
・フランスの技術研究⑽
・ステアウアにみる一流クラブの練習日程
・連載・技術教室②　高校クラブは夏までどのように練習するのか／佐野和夫
・〝マスコミ対策〟の現状と問題点
・連載④ハンドボールの歩み〈世界選手権編④〉

▼**第55号（1968年7月）**
・全日本大会審判員研修会報告／安藤純光
・日本ハンドボール協会創始期の思い出／松本良三
・フランスの技術研究⑾
・連載⑤ハンドボールの歩み〈世界選手権編⑤〉
・連載技術教室③　ボールの保持時間と得点の関係（上）／高橋健夫

▼**第56号（1968年8月）**
・第11回全日本学生選手権大会
・ＩＨＦ総会近づく

・日本ハンドボール協会創始期の思い出(7)／松本良三
・フランスの技術研究(12)
・連載⑥ハンドボールの歩み（世界選手権編⑥）
・連載・技術教室④　ボール保持時間と得点の関係（下）／高橋健夫

▼第57号（1968年9月）
・第20回全日本総合選手権大会
・第19回全日本高校選手権大会
・平沼会長の思い出(1)／松本良三
・フランスの技術研究(13)
・連載・技術教室⑤　シュートからみた女子選手（上）／北川浩

▼第58号（1968年10月）
・世界女子選手権の中止決まる
・IHF総会出席の荒川理事長に聞く
・第23回国体展望
・第18回全日本学生選抜東西対抗
・第11回全日本教職員選手権大会
・連載⑦ハンドボールの歩み（世界選手権編⑦）
・フランスの技術研究(14)
・連載・技術教室⑥　シュートからみた女子選手（下）／北川浩

▼第59号（1968年11月）
・第23回国民体育大会
・臨時評議員会、理事会
・IHF総会に出席して／荒川清美
・フランスの技術研究(15)
・連載⑧ハンドボールの歩み（世界選手権編⑧）

▼第60号（1968年12月）
・全日本教職員連盟（仮称）結成へ
・国体における高校選抜編成の諸問題
・秋の学生リーグ戦
・フランスの技術研究(16)
・連載・技術教室⑥　基礎技術の重要さを強調／松島陽太郎

▼第61号（1969年2月）
・時評
・全日本第一次候補選手決定
・中学校指導要領に復活
・第9回全日本実業団選手権組合せと予想
・複審制を検討―審判部合同会議
・ハンドボール選手の体力測定実施報告(1)
・第15回全日本選抜選手権
・球界パトロール
・馬場副会長欧州だより(2)
・競技人口は200万
・フランスの技術研究(17)
・ハンドボールの歩み⑨

▼第62号（1969年3月）
・時評
・全国理事会・評議員会開かる
・全日本教職員連盟設立
・43年度重大ニュース
・全日本候補東京で合宿
・第9回全日本実業団選手権
・ハンドボール選手の体力測定実施報告(2)
・球界パトロール
・馬場太郎氏欧州だより(3)
・フランスの技術研究(18)
・ハンドボールの歩み⑩

▼第63号（1969年4月）
・新企画「ミュンヘンへの道」
・時評
・全国理事会開く
・昭和44年度登録規定
・日本協会新体制の問題点
・田村会長に抱負を聞く
・世界選手権組合せ内定
・全日本、5月にルーマニアへ
・体力測定報告③
・体協の課題とハンドボール界
・審判技術への提言／光島磯雄
・フランスの技術研究(19)
・欧州だより(4)／馬場太郎
・ハンドボール界の歩み⑪

▼第64号（1969年5月）
・「ミュンヘンへの道」
・時評
・世界選手権基金具体化
・専門委員会決まる
・欧州遠征全日本男子紹介
・全日本が圧勝
・強化選手を指名
・1967年展望
・高体連20周年を迎う②
・フランスの技術研究(20)
・ハンドボールの歩み⑫

▼第65号（1969年6月）
・「ミュンヘンへの道」
・時評
・世界選手権基金案実施へ
・全日本が転戦
・国際試合展望
・近づく国際審判講習会
・高体連20周年を迎う③
・ハンドボールの歩み⑬
・球界パトロール
・春の各地学生
・ヨーロッパの技術研究(1)
・技術リポート

▼第66号（1969年7月）
・「ミュンヘンへの道」
・時評
・実施近づく世界選手権基金運動
・世界選手権基金募集委規程案
・ルーマニア合宿終る
・ルーマニア各地を転戦
・日本大、韓国遠征へ
・韓国遠征校選考試合
・全日本審判員研修会／安藤純光
・球界パトロール
・球技8ヶ国説は不明確
・常務理事会議事録
・高体連20周年を迎う④
・ヨーロッパの技術研究(2)

▼第67号（1969年8月）
・「ミュンヘンへの道」
・時評
・ヨーロッパ遠征特集
　タスマジャン杯で3位
　ルーマニアで試合
　ハンガリーの試合
　西ドイツの試合
　遠征から帰って
・韓国遠征速報
・世界選手権基金なお検討
・世界女子選手権中止
・全日本総合選手権組合せ予想
・全日本高校選手権組合せ予想
・全日本教職員選手権組合せ予想
・全国自衛隊大会
・クラブチームをめぐって
・ヨーロッパの技術研究③
・ハンドボールの歩み⑭
・高体連20周年を迎う⑤

▼第68号（1969年9月）
・「ミュンヘンへの道」
・時評
・全日本男子国内試合出場へ
・五輪参加国問題
・第16回IHF審判講習会報告／山田 計
・第21回全日本総合選手権
・第20回全日本高校選手権
・インターハイに拾う
・日韓高校親善大会
・第12回全日本教職員選手権
・全日本選手権総評（総合、高校、教職員）
・日体大韓国遠征日記(上)／北川勇喜、井上亮一
・全国スポーツ少年団大会報告／高橋健夫
・ヨーロッパ遠征報告(1)／選手リポート、コーチ座談会

▼第69号（1969年10月）
・「ミュンヘンへの道」
・時評
・全日本第3次候補を発表
・理事長荒川清美氏
・全日本男子、国内転戦記録
・全日本男子チームをみて／光島礒雄
・全日本学生選抜東西対抗
・球界パトロール
・李韓国高校監督に聞く
・日体大韓国遠征報告（下）
・ハンドボールの歩み⑮
・欧州遠征全日本男子リポート選手寄稿ほか
・ヨーロッパ技術研究(4)
・第24回国体展望

▼第70号（1969年11月）
・「ミュンヘンへの道」
・時評
・IHF、オリンピックは男子16を要望
・全日本選抜出場チーム決まる
・〝選抜〟の検討が焦点
・世界選手権基金運動新局面へ
・全国クラブ大会私案
・波紋広がるモロッコの抗議
・全日本学生選手権展望
・関東学生秋季リーグ戦
・ヨーロッパ遠征報告③
・特別研究報告／ハンドボール発祥はデンマーク／馬場太郎
・ハンドボールの歩み⑯
・ヨーロッパの技術研究(5)

▼第71号（1969年12月）
・「ミュンヘンへの道」
・時評
・オリンピックは男子16で実施
・来秋西ドイツを招待
・全日本男子、関東選抜と対戦
・全国理事会開がる
・全国評議会開かる
・全日本選抜予想
・全日本学生選手権
・国民体育大会
・ヨーロッパ遠征報告④
・ハンドボールの歩み⑰

▼第72号（1970年2月）
・世界選手権に出発するに際して／田村正衛団長
・世界選手権選手団を送る／荒川清美
・全日本選手団決る
・全日本代表壮行試合
・選手の横顔と抱負
・代表チーム監督の抱負
・世界選手権と日本
・世界選手権を展望する
・常務理事会議事録
・高校優秀選手決る
・定例理事会から
・第16回全日本選抜選手権
・第10回実業団選手権展望
・ルブキングの横顔
・ヨーロッパの技術研究⑥
・ハンドボールの歩み⑱

▼第73号（1970年3月）
・世界選手権予選リーグ速報
・ベストセブン優秀チーム決まる
・年少層対象の事業を研究
・大詰めの全国大会再検討
・全国評議員会理事会開かる
・第10回全日本実業団選手権
・球界パトロール
・1969年を回顧する
・昭和45年度の規則改正について／審判部長・安藤純光
・ハンドボール研修会報告
・現代スポーツ論／ 神田順治
・1969年重大ニュース
・高体連部長就任挨拶／徳永陸繁
・高体連部長に徳永氏
・実連理事長に田中氏再選
・全日本学生連盟規約

▼第74号（1970年4月）
・〝ミュンヘン〟へ大きな希望
・世界選手権全成績
・予選リーグB組
・日本―ユーゴ戦観戦記／湧永儀助
・9位決定リーグ戦
・ベストエイト・トーナメント
・予選リーグA組
・予選リーグC組
・予選リーグD組
・国際親善試合
・オリンピック出場問題
・「全自衛隊連盟」発足
・登録規定決まる

▼第75号（1970年5月）
・時評
・ミュンヘンへの道
・今後の頂点強化対策
・年少層対策を考える
・全日本総合12月に
・審判員審査厳格に
・国際試合を断念
・座談会／遠征を顧みて
・遠征選手リポート(1)
・学生界幕開く

▼第76号（1970年6月）
・時評
・ミュンヘンへの道
・全日本総合推せんチーム
・今年の日韓交流
・70年の話題を探る（上）
・ペライ氏来日
・世界選手権リポート／村田弘
・遠征選手リポート(2)
・ナショナル選手の体力について①
・ハンドボールの歩み⑲

▼第77号（1970年7月）
・時評
・ミュンヘンへの道
・成均館大が来日
・世界選手権回顧（IHF公報）
・強化日程決まる
・70年の話題を探る（下）
・IHF講習会へ派遣
・全日本審判員研修会報告／安藤純光
・全自衛隊大会開く
・中学校指導講習会要項
・実連男子2部制で
・学連新理事陣決まる
・球界パトロール
・ハンドボールの歩み⑳

▼第78号（1970年8月）
・第4回日韓大学交流
・韓国役員に聞く
・第22回全日本総合選手権、第21回全日本高校選手権、第13回全日本教職員選手権組み合せ
・沖縄球界の現状
・ナショナル選手の体力について②／広田公一、北川勇喜、渡辺慶寿
・ハンドボールの歩み㉑

▼第79号（1970年9月）
・ミュンヘンへの道
・第22回全日本総合選手権
・第21回全日本高校選手権
・日韓高校交流大会
・IHF総会近づく
・台湾チーム来日
・第13回全日本教職員選手権
・夏の大会回顧
・高校選手の体力について

▼第80号（1970年10月）
・日本、アジア地域予選へ
・国民体育大会予想
・オリンピック候補合宿おわる
・新居浜工高訪韓リポート
・住化菊本、韓国へ
・クラブ．中学対策を考える
・痛感すること／光島礒雄
・IHFコーチンシンポジウム報告①／竹野奉昭

・スウェーデンナショナルチーム来日迫る
・オリンピックアジア予選入場券前売近づく
・第12回全日本実業団選手権
・第22回全日本高校選手権
・第14回全日本教職員選手権
・日韓高校親善試合
・日韓学生遠征リポート（上）
・台湾から少女チーム

▼**第91号（1971年10月）**
・五輪予選代表決る
・全国評議員会・理事会開く
・日本・スウェーデン戦特集
・全日本の課題と代表
・日韓学生親善リポート（下）
・全日本学生東西対抗
・第26回国体展望
・全国スポーツ少年団大会報告
・中学大会、花ざかり

▼**第92号（1971年11月）**
・いよいよ開幕アジア予選
・アジア予選展望
・日本代表の紹介
・イスラエル・韓国の陣容
・審判は・スウェーデンペア
・全日本を激励する中・高校生寄稿
・世界女子選手権展望
・女子全日本選手の抱負
・東アジアのハンドボール
・全日本総合代表決る
・第26回国体速報
・底辺拡充策を望む／望月伸三郎
・全日本教職員選手権研修会報告

▼**第93号（1971年12月）**
・日本宿願の五輪出場権握る
・オリンピックアジア予選詳報
・全国一丸の協力に感謝
・5年間の労苦鮮やかに実る
・雄図挫折の韓イ・両国
・エミールホルル技術委員長に聞く
・地域連盟結成案を提出
・新しく五輪候補選手を選出
・ポストアジア予選（上）
①日本の五輪入賞は有望
②今後の頂点強化対策
③今こそ底辺拡充を
・全日本総合選手権展望
・ヨーロッパを転戦する女子チーム好調
・全日本学生選手権

▼**第94号（1972年2月）**
・ミュンヘンへの道
・時評
・オリンピック候補決る
・第4回世界女子選手権
・欧州転戦第2報
・遠征より帰って／山田計
・GWダンケルセン来日
・普及部全国委員会開く
・第23回全日本総合選手権
・アジア予選回顧
・ポストアジア予選（下）
④役員の若返りと体質の改善
⑤日本リーグは実現されるか
⑥立遅れている女子対策
・海外トピックス

▼**第95号（1972年3月）**
・日本ハンドボール協会の財政危機を訴える
・全国評議員会・理事会
・THW・キール、GWダンケルセン来日
・オリンピック強化試合
・女子欧州遠征レポート
・学生界のニュース
・普及部テキスト案
・海外トピックス
・ミュンヘンオリンピック応援団募集
・実業団四強リーグ

▼**第96号（1972年4月）**
・ミュンヘンへの道
・時評
・オリンピック出場正式決定
・荒川理事長に聞く
・日本実業団女子が訪韓
・中学大会準備進む
・THW・キール2勝1敗で帰国
・単独国際交流規程を施行
・オリンピック欧州予選
・女子欧州遠征レポート②
・アメリカのハンドボール
・指導テキスト案②
・46年度常務理事会の動き
・46年度重大ニュース

▼**第97号（1972年5月）**
・ミュンヘンへの道
・時評
・オリンピック組み合せ決まる
・オリンピック第2次候補発表
・晴れの代表6月11日決定
・全日本男子、欧州遠征を断念
・二つの日韓交流
・全日本自衛隊選手権
・全国中学生大会
・ダンケルセン戦後記
・ラフプレーの原因／光島磯雄
・日独試合総記録
・たくましくなった全日本
・競技規則の改訂／安藤純光
・ヨーロッパ予選をみて／竹野奉昭
・明日への提言（投書欄）
・全日本女子、貫録勝ち
・熊本総合合宿

▼**第98号（1972年6月）**
・ミュンヘンへの道
・時評
・オリンピック代表11日決定
・地域連盟承認へ
・全日本選抜・実業団トーナメント予想
・日韓学生交流
・女子実業団韓国遠征
・自衛隊大会
・オリンピックとハンドボール
・全国70チームの新陣容
・沖縄帰る
・明日への提言（投書欄）
・7MTで勝敗決定

▼**第99号（1972年7月）**
・オリンピック代表決る
・評議員会理事会
・オリンピック代表の横顔
・オリンピックとハンドボール②
・第19回NHK杯選抜
・第6回学生日韓交流
・第13回女子実業団選手権展望
・実業団トーナメント
・日韓女子実業団交流報告②
・春季学生リーグの記録

▼**第100号（1972年8月）**
・ハンドボール代表を激励する／青木半治
・初のオリンピック参加にあたって／田村正衛、荒川清美
・勝利の執念に燃えて／村田弘、竹野奉昭、近森克彦、木野　実
・ミュンヘンオリンピックを展望する
・今シーズンのユーゴ、ハンガリー、アメリカ
・聖火に競う16代表の横顔
・オリンピック選手の決意
・オリンピック代表決定まで
・ミュンヘンオリンピック・ハンドボール競技要項
・気力に燃える初合宿
・第23回全日本高校選手権展望
・第13回全日本女子実業団選手権
・第15回教職員選手権展望
・第1回中学生大会
・本誌100号を記念して

※次号につづく

各地学生春季リーグ戦から

北海道

（5月18日～20日／室蘭市立体育館）

▼男子1部

小樽商大	19－19	北教大函館
函館大	55－11	室蘭工大
北大	27－20	北海学園大
函館大	53－14	北教大函館
北海学園大	35－22	小樽商大
北大	24－13	室蘭工大
函館大	36－8	小樽商大
北大	34－13	函館教大
北海学園大	33－25	室蘭工大
北大	25－12	小樽商大
函館大	43－21	北海学園大
北教大函館	29－8	室蘭工大
小樽商大	17－10	室蘭工大
北海学園大	39－25	北教大函館
函館大	24－14	北大

〔順位〕①函館大②北海道大③北海学園大④小樽商科大⑤北海道教育大函館分校⑥室蘭工大

▼男子2部

北星学園大	24－19	北海道工大
北教大釧路	26－23	北教大旭川
札幌大	33－20	北大医学部
北星学園大	25－15	北教大旭川
北大医学部	44－28	北海道工大
札幌大	22－21	北教大釧路
北星学園大	25－15	北大医学部
北教大釧路	38－22	北海道工大
札幌大	29－22	北教大旭川
北教大釧路	25－16	北星学園大
北教大旭川	37－11	北大医学部
札幌大	38－20	北海道工大
札幌大	32－15	北星学園大
北教大旭川	21－20	北海道工大
北教大釧路	29－17	北大医学部

〔順位〕①札幌大②北海道教育大釧路分校③北星学園大④北海道教育大旭川分校⑤北海道大学医学部⑥北海道工大

▼男子3部

道都大	26－22	釧路公立大
北見工大	31－21	札幌学院大
道都大	51－23	学園北見大
北見工大	31－22	道都大
札幌学院大	44－21	学園北見大
北見工大	35－17	釧路公立大
釧路公立大	42－18	学園北見大
道都大	27－17	札幌学院大
北見工大	54－13	学園北見大
釧路公立大	22－18	札幌学院大

〔順位〕①北見工大②道都大③釧路公立大④札幌学院大⑤北海学園北見大

▼女子

北教大旭川	28－11	北星学園大
道女短大	17－8	北星学園大
北教大旭川	18－15	道女短大

〔順位〕①北海道教育大旭川分校②北海道女子短大③北星学園大

東海

（日程場所不明）

▼男子1部

中部大	33－15	愛知大
中京大	41－22	名古屋大
名城大	34－11	愛知大
中部大	40－11	名古屋大
愛知学院大	29－18	愛知大
愛知学院大	22－20	名古屋大
名城大	25－19	中京大
中部大	28－16	愛知学院大
名城大	33－16	名古屋大
中京大	35－10	愛知大
中京大	28－25	愛知学院大
中部大	22－20	名城大
愛知大	34－23	名古屋大
名城大	30－24	愛知学院大
中部大	27－23	中京大

〔順位〕①中部大②名城大③中京大④愛知学院大⑤愛知大⑥名古屋大

▼男子2部

愛教大	41－15	名経大
名学大	33－23	名工大
名学大	22－21	静岡大
南山大	28－24	名経大
南山大	31－23	名学大
愛教大	47－17	静岡大
名学大	27－21	名経大
南山大	29－23	名工大
名工大	23－19	静岡大
愛教大	22－14	名学大
名経大	26－24	名工大
南山大	32－23	静岡大
愛教大	39－22	名工大
名経大	29－27	静岡大
愛教大	25－23	南山大

〔順位〕①愛知教育大②南山大③名古屋学院大④名古屋経済大⑤名古屋工業大⑥静岡大

▼男子3部

滋賀大	34－14	豊田工大
日福大	31－14	三重大
岐阜大	25－19	豊田高専
日福大	21－14	豊田工大
三重大	34－26	豊田工大
日福大	26－17	豊田高専
滋賀大	20－20	三重大
岐阜大	34－10	豊田工大
三重大	31－30	豊田高専
岐阜大	21－11	日福大
滋賀大	20－17	豊田高専
滋賀大	18－8	日福大
岐阜大	27－23	三重大
豊田高専	50－6	豊田工大
岐阜大	22－14	滋賀大

〔順位〕①岐阜大②滋賀大③日本福祉大④三重大⑤豊田工業専門学校⑥豊田工大

▼男子4部

常葉大	25－12	愛知医大
豊橋科技大	32－18	朝日大

常葉大 21－15 朝日大
豊橋科技大 27－23 常葉大
朝日大 21－11 愛知医大
岐阜大 13－11 常葉大
〔順位〕①豊橋科学技術大②常葉大③朝日大④愛知医科大

▼女子1部
中京大 36－10 南山大
中京女大 34－7 愛教大
中京大 28－10 愛教大
中京女大 44－7 南山大
中京大 17－16 中京女大
愛教大 17－7 南山大
中京大 14－9 南山大
中京女大 31－6 愛教大
中京大 23－16 愛教大
中京女大 44－7 南山大
南山大 12－11 愛教大
中京女大 29－22 中京大
〔順位〕①中京女子大②中京大③愛知教育大④南山大

▼女子2部
常葉大 12－10 三重大
岐阜大 19－5 静岡大
静岡大 15－14 日福大
三重大 14－11 岐阜大
常葉大 11－11 日福大
常葉大 14－7 静岡大
三重大 26－10 静岡大
岐阜大 15－8 日福大
三重大 12－0 日福大
〔順位〕①三重大②岐阜大③常葉大④静岡大⑤日福大

北信越

（6月9、10日／金沢市総合体育館）

▼男子1部
金沢工大 19－16 新潟大
新潟大 30－9 福井大
新潟大 28－14 金沢大
新潟大 26－17 信州大
金沢工大 28－14 福井大
金沢工大 23－10 金沢大
金沢工大 26－12 信州大
福井大 18－14 金沢大
福井大 24－21 信州大
信州大 26－18 金沢大
〔順位〕①金沢工業大②新潟大③福井大④信州大⑤金沢大

▼男子2部
富山大 29－10 金沢美工大
富山大 41－13 富山医大
富山大 31－11 北陸大
金沢美工大 20－19 富山医大
金美工大 27－23 北陸大
北陸大 25－20 富山医大
〔順位〕①富山大②金沢美術工芸大③北陸大④富山医科薬科大

▼女子
富山大 20－11 金沢大
富山大 19－12 信州大
富山大 27－4 新潟大
富山大 20－12 仁愛短大
金沢大 15－6 信州大
金沢大 22－8 新潟大
金沢大 17－15 仁愛短大
信州大 24－11 新潟大
信州大 16－14 仁愛短大
仁愛短大 19－12 新潟大
〔順位〕①富山大②金沢大③信州大④仁愛短期大②新潟大

中四国

（5月14～16日／山口県スポーツ文化センター）

▼男子1部
山口大 15－14 愛媛大
山口大 20－16 広島大
山口大 16－12 松山大
山口大 23－8 高知大
愛媛大 14－11 広島大
愛媛大 13－8 松山大
愛媛大 14－13 高知大
広島大 19－17 松山大
広島大 18－12 高知大
松山大 22－11 高知大
〔順位〕①山口大②愛媛大③広島大④松山大⑤高知大

▼男子2部
香川大 14－13 岡山大
香川大 17－15 徳山大
香川大 20－14 近畿大
香川大 27－9 島根大
岡山大 25－15 徳山大
岡山大 24－17 近畿大
岡山大 21－14 島根大
徳山大 27－17 近畿大
徳山大 27－19 島根大
近畿大 16－12 島根大
〔順位〕①香川大②岡山大③徳山大④近畿大⑤島根大

▼男子3部
広島修道大 20－17 広島経済大
広島修道大 27－11 徳島大
広島修道大 22－14 鳥取大
広島修道大 20－16 広島工大
広島経済大 22－11 徳島大
広島経済大 21－12 鳥取大
広島経済大 22－14 広島工大
徳島大 19－14 鳥取大
徳島大 24－12 広島工大
鳥取大 19－16 広島工大
〔順位〕①広島修道大②広島経済大③徳島大④鳥取大⑤広島工大

▼女子1部
高知大 12－5 愛媛大
高知大 9－9 広島大
高知大 20－7 香川大
愛媛大 14－13 広島大
愛媛大 25－11 香川大
広島大 24－8 香川大
〔順位〕①高知大②愛媛大③広島大④香川大

▼女子2部
○Xグループ
岡山大 14－14 山口大
○Yグループ
岡山県短 29－3 岡山女短
岡山県短 40－2 鳴門教大
岡山女短 11－11 鳴門教大
○3位決定戦
山口大 26－5 岡山女短
○優勝決定戦
岡山県短 26－6 岡山大
〔順位〕①岡山県立短大②岡山大③山口大④岡山女短大⑤鳴門教育大

各地の記録から…

関東

全国高校東京都予選

〈男子〉

▼1回戦

勝者	スコア	敗者
調布北	21―17	保谷
日野台	17―13	小金井北
富士	27―10	江北
農大一	23―10	豊多摩
昭和一	不戦勝	第二商
東村山	15―9	福生
三鷹	31―9	武蔵村山
城北学園	28―7	広尾
武工大附	32―8	白鴎
墨田川	20―17	専大附
府中西	27―7	北多摩
館	16―11	府中東
中大附	30―8	片倉
青山学院	25―9	淵江
光丘	23―3	紅葉川
井草	25―16	駒込
国立	17―10	錦城
砂川	29―11	南多摩
第五商	不戦勝	田無工
大泉	20―7	南
学大附	35―4	高島
江東北	不戦勝	大泉北
国分寺	27―9	秋川
清瀬	14―8	武蔵
東大和	31―5	創価
修徳	30―8	大崎
石神井	不戦勝	開成
久留米西	25―11	秋留台
科技学園	28―14	稲城
神代	20―19	東海大菅生
蒲田	15―10	雪谷
城西大附	17―4	足立
駒大高	21―19	深川
永山	39―9	南平
忠生	21―14	久留米
桜美林	24―11	拝島
世田谷工	24―9	上野
江戸川	35―6	向丘
葛飾野	不戦勝	鷺宮
富士森	28―11	八王子東
府中	45―14	武蔵村山東
青山	10―9	正則学園
新宿	19―17	日大二
本所	31―11	佼成
西	不戦勝	明正

▼2回戦

勝者	スコア	敗者
調布北	29―4	野津田
日野台	23―11	田無
富士	29―12	早実
農大一	20―12	小岩
東村山	11―10	昭和一
三鷹	35―5	小金井工
城北学園	32―7	大森東
墨田川	25―21	武工大附
府中西	21―11	館
中大附	37―2	武蔵野北
青山学院	27―3	杉並
光丘	23―14	井草
国立	21―6	砂川
山崎	15―14	第五商
大泉	24―14	桜水商
学大附	25―12	江東工
国分寺	19―7	清瀬
東大和	16―10	日野
両国	20―12	荻窪
石神井	21―19	修徳
久留米西	23―17	科技学園
神代	24―14	羽村
目黒	不戦勝	蒲田
駒大高	19―15	城西大附
永山	30―9	忠生
東大和南	18―7	桜美林
世田谷工	22―8	安田学園
江戸川	21―15	葛飾野
富士森	35―7	府中工
府中	34―5	小平南
新宿	24―10	青山
本所	18―17	西

▼3回戦

勝者	スコア	敗者
日野台	14―8	調布北
農大一	20―16	富士
三鷹	25―12	東村山
城北学園	30―20	墨田川
中大附	18―11	府中西
青山学院	25―9	光丘
国立	34―3	山崎
学大附	26―13	大泉
東大和	23―18	国分寺
両国	29―13	石神井
神代	21―14	久留米西
駒大高	30―21	目黒
東大和南	21―18	永山
世田谷工	18―17	江戸川
府中	30―20	富士森
新宿	19―16	本所

▼4回戦

勝者	スコア	敗者
農大一	25―21	日野台
三鷹	27―14	城北学園
中大附	18―16	青山学院
国立	16―11	学大附
東大和	32―19	両国
神代	23―17	駒大高
東大和南	24―20	世田谷工
府中	26―14	新宿

▼5回戦

勝者	スコア	敗者
明星	14―9	農大一
三鷹	20―16	成城
中大附	24―13	南野
拓大一	19―11	国立
日体荏原	19―12	東大和
立川	17―14	神代
東大和南	19―13	早大学院
東京	27―16	府中

▼6回戦

勝者	スコア	敗者
明星	25―17	三鷹
拓大一	23―17	中大附
立川	11―8	日体荏原
東京	24―8	東大和南

▼決勝リーグ

勝者	スコア	敗者
東京	25―13	立川
明星	22―13	拓大一
明星	23―10	立川
東京	14―8	拓大一
拓大一	17―8	立川
明星	16―13	東京

〔順位〕①明星②東京③拓大一④立川

〈女子〉

▼1回戦

勝者	スコア	敗者
野津田	17―5	拓大一
小金井北	不戦勝	武蔵村山
久留米	19―3	調布北
八王子東	28―4	府中西
武蔵村山東	16―4	東村山
小平	22―1	保谷

▼2回戦

勝者	スコア	敗者
井草	14―6	光丘
武蔵野女	15―4	武蔵野北
農業	12―3	明泉鶴川
八雲学園	18―6	小岩
第一商	11―9	武蔵
福生	16―7	第三商
砂川	21―7	野津田
広尾	9―6	墨田川
上野	20―3	白鴎
神代	13―5	南野
桐朋女	26―0	小金井北
豊多摩	8―3	日大二
日野	19―9	府中東
明星学園	不戦勝	久留米
目黒	12―6	淵江
東大和	17―12	東大和南
八王子東	16―10	日野台
大崎	不戦勝	蒲田
東	10―9	立教女
富士森	13―12	久留米西
第五商	14―5	武蔵村山東
学大附	不戦勝	関東国際
江戸川	16―7	雪谷
田無	18―6	国立
小平	18―13	国分寺
富士	16―12	西
共立第二	17―9	清瀬

東海大菅生 11－8 文華女

▼3回戦

井草 20－2 荻窪
武蔵野女 13－3 農業
八雲学園 21－5 第一商
福生 15－10 砂川
上野 16－5 広尾
桐朋女 15－8 神代
豊多摩 14－13 農大一
日野 30－1 明星学園
桜水商 11－4 淵江
八王子東 16－6 東大和
東 5－4 大崎
富士森 16－1 第五商
学大附 6－4 江戸川
田無 14－10 小平
富士 14－7 本所
共立第二 12－7 東海大菅生

▼4回戦

武蔵野女 21－5 井草
八雲学園 17－10 福生
桐朋女 14－10 上野
日野 10－7 豊多摩
八王子東 16－4 桜水商
富士森 13－4 東
田無 14－10 学大附
富士 17－16 共立第二

▼5回戦

江東商 22－7 武蔵野女
文大杉並 18－12 八雲学園
日体桜華 23－15 桐朋女
石神井 16－5 日野
藤村女 26－5 八王子東
菊華 14－8 富士森
青山学院 11－9 田無
佼成女 26－8 富士

▼6回戦

江東商 19－7 文大杉並
石神井 23－9 日体桜華
藤村女 24－8 菊華
佼成女 20－7 青山学院

▼決勝リーグ

江東商 21－15 石神井
佼成女 14－13 藤村女
江東商 21－15 藤村女
佼成女 11－11 石神井
藤村女 14－11 石神井
江東商 14－12 佼成女

〔順位〕①江東商②佼成女子③藤村女子④石神井

東海

第44回愛知県高校総体

（5月20、27、6月3日／安城東京体育館ほか）

○東三河支部大会

〈男子〉

▼1回戦

国府 18－9 蒲郡
御津 17－14 豊橋南
桜丘 22－10 豊橋工
豊橋西 22－17 時習館
三谷水産 18－14 豊橋商
豊丘 18－9 新城東
豊川工 26－13 豊橋東

▼2回戦

蒲郡東 23－21 国府
桜丘 24－15 御津
豊橋西 19－16 三谷水産
豊川工 28－15 豊丘

▼準決勝

蒲郡東 24－19 桜丘
豊川工 25－10 豊橋西

▼3位決定戦

桜丘 20－12 豊橋西

▼決勝

蒲郡東 25（13－9、12－11）20 豊川工

〈女子〉

▼1回戦

豊橋東 16－7 新城東
豊丘 13－10 国府
時習館 21－3 宝陵
桜丘 15－10 蒲郡
蒲郡東 14－10 御津

▼2回戦

豊橋南 15－8 豊橋東
豊丘 13－12 時習館
豊橋西 19－10 桜丘
豊橋商 13－10 蒲郡東

▼準決勝

豊橋南 15－11 豊丘
豊橋西 11－9 豊橋商

▼3位決定戦

豊橋商 14－8 豊丘

▼決勝

豊橋西 18（8－6、10－3）9 豊橋南

○西三河支部大会

〈男子〉

▼1回戦

安城東 17－15 衣台
刈谷工 19－10 幸田
刈谷 25－4 吉良
岡崎 24－10 安城
岡崎工 18－10 西尾東
岡崎北 15－7 三好
安城南 17－9 西尾
豊田南 16－8 碧南工
三河 19－13 刈谷北
豊野 18－11 豊田工
碧南 29－8 高浜
豊田 17－11 一色

▼2回戦

岡崎城西 28－7 安城東
刈谷 17－10 刈谷工
岡崎 32－6 岡崎工
岡崎東 16－14 岡崎北
知立東 20－4 安城南
豊田南 16－11 三河
豊野 15－11 碧南
岡崎西 24－10 豊田

▼3回戦

岡崎城西 26－10 刈谷
岡崎 14－11 岡崎東
知立東 15－8 豊田南
岡崎西 22－19 豊野

▼5～8位決定リーグ

豊田南 13－11 豊野
豊野 21－16 岡崎東
豊野 18－16 刈谷
豊田南 22－22 岡崎東
刈谷 16－13 豊田南
岡崎東 20－19 刈谷

▼決勝リーグ

岡崎城西 28－8 知立東
岡崎城西 31－11 岡崎西
岡崎城西 24－8 岡崎
知立東 18－16 岡崎西
知立東 22－10 岡崎
岡崎西 21－13 岡崎

〈女子〉

▼1回戦

豊田東 14－6 岡崎商
刈谷北 8－6 西尾東
西尾 10－3 愛教大附
豊田 12－9 衣台
刈谷 10－6 安城東
豊野 14－7 安城
岩津 25－4 碧南
岡崎 30－16 知立
岡崎北 13－10 安城南
幸田 7－5 一色
知立東 12－9 吉良

▼2回戦

安城学園 15－4 豊田東
西尾 9－4 刈谷北
岡崎東 17－11 豊田
岡崎西 25－3 刈谷
豊田南 10－9 豊野
岡崎 14－3 岩津
岡崎北 19－4 幸田
三好 21－0 知立東

▼3回戦

安城学園 23－4 西尾
岡崎西 21－7 岡崎東
豊田南 7－5 岡崎
三好 18－3 岡崎北

▼5～8位決定リーグ

岡崎 13－9 岡崎東
岡崎 13－7 岡崎北
岡崎 10－5 西尾
岡崎東 25－11 岡崎北
岡崎東 21－14 西尾
岡崎北 10－5 西尾

▼決勝リーグ

岡崎西 18－10 安城学園
安城学園 13－8 三好

安城学園 19－3 豊田南
三好 10－8 岡崎西
岡崎西 7－2 豊田南
三好 16－5 豊田南

○知多支部大会

〈男子〉

▼1回戦
半田工 16－11 東海南
横須賀 15－11 知多
東浦 20－15 大府
武豊 17－11 常滑北

▼2回戦
半田東 21－12 半田工
阿久比 16－8 横須賀
知多東 19－13 東浦
半田 14－9 武豊

▼準決勝
半田東 22－13 阿久比
半田 15－12 知多東

▼3位決定戦
知多東 28－17 阿久比

▼決勝
半田東 15（5－4、10－4）8 半田

〈女子〉

▼1回戦
東浦 14－8 東海商
知多東 9－1 知多
桃陵 5－2 半田東
半田商 8－6 阿久比
内海 10－5 常滑北
大府 21－7 常滑
武豊 27－6 東海南

▼2回戦
半田 18－6 東浦
桃陵 10－5 知多東
半田商 17－6 内海
武豊 21－5 大府

▼準決勝
半田 14－10 桃陵
武豊 16－11 半田商

▼3位決定戦
半田商 17－9 桃陵

▼決勝
半田 10（8－5、2－1）6 武豊

○名南支部大会

〈男子〉

▼1回戦
昭和 17－13 名古屋大谷
日進 15－10 松蔭
中村 14－13 惟信
南陽 23－16 富田
東郷 14－7 名商大付
日進西 18－8 享栄
緑 25－8 名古屋南
名城大附 16－10 熱田
瑞陵 15－9 豊明
鳴海 17－9 星城
天白 27－8 名市工

▼2回戦
桜台 27－4 昭和
日進 16－9 同朋
南陽 16－6 中村
名南工 28－10 東郷
向陽 22－10 日進西
緑 26－14 名城大附
瑞陵 13－12 鳴海
中京 27－8 天白

▼3回戦
桜台 39－5 日進
名南工 30－11 南陽
向陽 18－15 緑
中京 28－13 瑞陵

▼準決勝
桜台 24－12 名南工
中京 29－18 向陽

▼3位決定戦
名南工 25－12 向陽

▼決勝
中京 13－11 桜台

〈女子〉

▼1回戦
中川商 26－3 中村
桜台 11－10 若宮商
東郷 12－6 屋城
瑞陵 8－7 緑
日進西 9－8 昭和
天白 18－8 高蔵

▼2回戦
名短付 41－6 中川商
南陽 13－5 名古屋南
松蔭 12－6 桜台
東郷 8－7 向陽
鳴海 19－3 瑞陵
豊明 9－6 日進西
惟信 22－7 熱田
東海女 20－3 天白

▼3回戦
名短付 39－8 南陽
東郷 19－15 松蔭
鳴海 27－10 豊明
東海女 32－5 惟信

▼準決勝
名短付 47－0 東郷
東海女 32－4 鳴海

▼3位決定戦
鳴海 13－9 東郷

▼決勝
名短付 19（8－5、11－6）11 東海女

○名北支部大会

〈男子〉

▼1回戦
春日井西 24－14 栄徳
守山 28－10 長久手
名古屋北 13－8 東山工
高蔵寺 17－16 明和
名東 18－6 瀬戸西
春日井東 不戦勝 東邦
春日井工 17－10 山田
市工芸 17－9 千種
旭野 20－10 名古屋西
名大付 14－8 瀬戸
春日丘 22－2 愛知工
旭丘 19－9 春日井

▼2回戦
愛知 24－12 春日井西
名古屋北 12－12 守山（3PTC2）
高蔵寺 24－16 名東
春日井南 22－11 春日井東
東海 21－10 春日井工
市工芸 19－11 旭野
春日丘 16－13 名大付
旭丘 14－2 菊里

▼3回戦
愛知 28－10 名古屋北
春日井南 17－12 高蔵寺
東海 23－12 市工芸
旭丘 24－10 春日丘

▼5～8位決定戦
高蔵寺 18－3 名古屋北
市工芸 21－13 春日丘

▼7位決定戦
名古屋北 23－14 春日丘

▼5位決定戦
市工芸 14－13 高蔵寺

▼準決勝
愛知 27－10 春日井南
東海 25－17 旭丘

▼3位決定戦
春日井南 13－11 旭丘

▼決勝
愛知 22（12－7、10－13）20 東海

〈女子〉

▼1回戦
名古屋北 18－3 瀬戸
高蔵寺 14－12 春日井東
守山 7－7 春日井南（1PTC0）
瀬戸北 16－12 市工芸
菊里 24－6 春日井商
長久手 15－4 名古屋西
椙山 13－3 名大付
瀬戸西 13－11 市邨
千種 16－7 名東
淑徳 17－5 西陵商
春日井西 11－10 名古屋商
愛知商 17－6 東邦

▼2回戦
緑丘商 27－4 名古屋北
守山 18－4 高蔵寺
菊里 23－4 瀬戸北
春日井 27－2 長久手
旭野 19－5 椙山
瀬戸西 13－11 千種
春日井西 15－10 淑徳
中京女 23－7 愛知商

▼3回戦
緑丘商 20—6 守山
春日井 13—11 菊里
旭野 18—6 瀬戸西
中京女 22—17 春日井西
▼5～8位決定戦
菊里 14—11 守山
春日井西 21—11 瀬戸西
▼7位決定戦
守山 19—9 瀬戸西
▼5位決定戦
春日井西 23—8 菊里
▼準決勝
緑丘商 18—10 春日井
中京女 18—9 旭野
▼3位決定戦
春日井 19—14 旭野
▼決勝
中京女 16 (4—6, 12—9) 15 緑丘商

○尾張支部大会
〈男子〉
▼1回戦
犬山 11—8 尾北
美和 20—9 津島
佐織工 21—10 新川
一宮 19—7 尾関学園
一宮南 17—9 起工
西春 14—6 弥富
小牧南 19—14 丹羽
尾西 27—4 稲沢東
小牧工 13—11 江南
一宮興道 27—3 大成
蟹江 26—6 一宮工
平和 17—12 稲沢
一宮西 28—7 岩倉
▼2回戦
犬山南 33—3 犬山
佐織工 19—7 美和
一宮 19—12 一宮南
小牧南 18—13 西倉
一宮北 17—9 尾西
一宮興道 20—11 小牧工
蟹江 23—5 平和
一宮西 16—7 五条
▼3回戦
犬山南 15—11 佐織工
一宮 13—12 小牧南
一宮興道 14—6 一宮北
一宮西 13—12 蟹江
▼準決勝
一宮 18—14 犬山南
一宮西 16—16 一宮興道 (2PTC0)
▼決勝
一宮西 15 (6—4, 9—6) 10 一宮
〈女子〉
▼1回戦
一宮 20—6 一宮興道
美和 12—8 新川
一宮北 16—5 一宮南
津島 10—7 稲沢東
五条 19—8 蟹江
一宮西 20—2 津島女
▼2回戦
木曽川 13—5 一宮
尾北 9—6 江南
佐屋 17—3 美和
尾西 18—8 平和
犬山南 15—8 一宮北
西春 20—6 津島
五条 21—3 一宮商
一宮女 30—4 一宮西
▼3回戦
木曽川 9—5 尾北
佐屋 19—6 尾西
西春 16—16 犬山南 (2PTC1)
一宮女 12—5 五条
▼準決勝
佐屋 21—10 木曽川
一宮女 19—10 西春
▼決勝
佐屋 17 (8—9, 9—5) 14 一宮女

○県大会
〈男子〉
▼1回戦
知多北 18—16 一宮興道
桜丘 25—20 知立東
一宮 18—16 岡崎
旭丘 25—18 犬山南
半田 21—16 豊川工
向陽 26—20 岡崎西
▼2回戦
中京 28—14 知多東
東海 30—17 桜丘
春日井南 16—15 半田東
桜台 25—14 一宮
岡崎城西 28—19 旭丘
蒲郡東 23—20 名南工
一宮西 22—19 半田
愛知 39—16 向陽
▼3回戦
中京 24—16 東海
桜台 22—10 春日井南
岡崎城西 27—7 蒲郡東
愛知 25—10 一宮西
▼決勝リーグ
桜台 20—9 中京
岡崎城西 16—15 愛知
岡崎城西 21—20 中京
桜台 21—21 愛知
中京 26—20 愛知
岡崎城西 23—12 桜台
〔順位〕①岡崎城西②桜台③中京④愛知
〈女子〉
▼1回戦
豊田南 11—4 豊橋商
一宮女 17—13 春日井
木曽川 18—14 鳴海
西春 20—8 東郷
半田商 18—16 豊橋南
三好 15—7 旭野
▼2回戦
名短付 37—7 豊田南
半田 18—6 一宮女
中京女 16—14 武豊
木曽川 16—16 岡崎西 (5PTC4)
安城学園 21—11 西春
緑丘商 33—11 豊橋西
佐屋 26—10 半田商
東海女 21—10 三好
▼3回戦
名短付 13—6 半田
木曽川 12—8 中京女
安城学園 16—9 緑丘商
東海女 15—12 佐屋
▼決勝リーグ
名短付 24—4 木曽川
東海女 16—10 安城学園
名短付 26—8 安城学園
東海女 13—7 木曽川
名短付 14—11 東海女
安城学園 17—6 木曽川
〔順位〕①名短付②東海女③安城学園④木曽川

近畿

第43回大阪府高校春季総体

◎北ブロック予選
〈男子〉
▼1回戦
西野田工 40—7 扇町
刀根山 16—8 大阪学院
吹田東 16—14 池田
北千里 26—8 西淀川
池田北 20—17 山田
豊中 21—15 豊島
千里 40—4 柴島
東淀川 12—10 箕面
箕面学園 17—13 渋谷
桜塚 31—12 東淀工
東豊中 20—17 市岡
▼2回戦
北陽 23—7 西野田工
吹田東 19—17 刀根山
北千里 17—15 池田北
桜宮 13—10 豊中
都島工 26—8 千里
東淀川 20—9 箕面学園
北野 14—11 桜塚
大商学園 25—8 東豊中
▼3回戦
北陽 26—3 吹田東

桜宮 22－8 北千里
都島工 20－9 東淀川
大商学園 26－11 北野

▼準決勝

北陽 15－7 桜宮
都島工 16－11 大商学園

▼3位決定戦

大商学園 21－18 桜宮

▼決勝

北陽 19－14 都島工

〈女子〉

▼1回戦

刀根山 19－3 薫英
東淀川 11－10 池田
豊中 14－9 梅花
池田北 20－9 市岡

▼2回戦

宣真 25－4 刀根山
北野 19－8 桜塚
東豊中 12－0 柴島
箕面 19－8 東淀川
金蘭会 18－5 豊中
成蹊 22－7 千里
桜宮 18－5 豊島
福島女 30－7 池田北

▼3回戦

宣真 28－5 北野
東豊中 16－8 箕面
金蘭会 11－10 成蹊
福島女 13－8 桜宮

▼準決勝

宣真 12－0 東豊中
福島女 20－6 金蘭会

▼3位決定戦

金蘭会 12－0 東豊中

▼決勝

宣真 19－7 福島女

◎東ブロック予選

〈男子〉

▼1回戦

寝屋川 19－12 大東
加納 24－9 島上大冠
西寝屋川 14－9 高槻北
茨木 17－16 枚方
門真 16－15 牧野
同志社香里 23－16 交野
春日丘 21－12 門真南
三島 23－17 四条畷
城東工 23－7 茨木東
摂陵 27－9 関西大倉
芥川 19－11 磯島
守口北 14－7 南寝屋川
淀川工 17－10 島本

▼2回戦

長尾 12－11 寝屋川
西寝屋川 18－17 加納
茨木 19－12 門真
春日丘 23－9 同志社香里
島上 30－18 三島
摂陵 35－7 城東工
芥川 21－16 守口北
摂津 31－6 淀川工

▼3回戦

長尾 21－19 西寝屋川
春日丘 26－5 茨木
摂陵 18－11 島上
摂津 33－9 芥川

▼準決勝

春日丘 19－18 長尾
摂陵 24－13 摂津

▼3位決定戦

長尾 19－17 摂津

▼決勝

摂陵 19－10 春日丘

〈女子〉

▼1回戦

枚方 25－3 芥川
牧野 14－9 茨木
寝屋川 23－5 香里丘
東寝屋川 30－3 南寝屋川

▼2回戦

春日丘 14－5 枚方
門真 24－2 守口北
島上 19－3 高槻北
大阪市立 11－4 牧野
摂津 11－5 寝屋川
門真南 19－3 茨木東
長尾 12－6 大東
西寝屋川 36－9 東寝屋川

▼3回戦

春日丘 21－4 門真
大阪市立 11－7 島上
摂津 18－5 門真南
西寝屋川 33－4 長尾

▼準決勝

春日丘 23－9 大阪市立
西寝屋川 15－12 摂津

▼3位決定戦

摂津 21－11 大阪市立

▼決勝

春日丘 18－10 西寝屋川

◎中ブロック予選

〈男子〉

▼1回戦

八尾東 16－10 藤井寺工
藤井寺 25－6 汎愛
東住吉 20－7 大和川
阪南 11－9 高津
生野 18－3 教大平野
羽曳野 20－12 池島
住吉 15－10 山本
八尾 28－7 柏原
花園 27－7 港南

▼2回戦

桃山学院 51－3 八尾東
藤井寺 27－10 東住吉工
阪南 15－12 東住吉
天王寺 28－3 生野
上宮 34－9 羽曳野
清風 31－9 住吉
八尾 32－10 阿倍野
此花学院 30－7 花園

▼3回戦

桃山学院 36－15 藤井寺
阪南 13－10 天王寺
上宮 26－12 清風
此花学院 26－11 八尾

▼準決勝

桃山学院 31－10 阪南
上宮 12－7 此花学院

▼3位決定戦

此花学院 28－13 阪南

▼決勝

桃山学院 23－14 上宮

〈女子〉

▼1回戦

四天王寺 棄権 港南
大谷 18－5 八尾東
住吉 13－4 山本
信愛 13－10 高津
阪南 27－13 八尾
東住吉 14－3 池島
城南 10－7 東大阪
天王寺 23－4 蒔井寺

▼2回戦

四天王寺 19－4 大谷
信愛 14－7 住吉
阪南 22－10 東住吉
天王寺 16－4 城南

▼準決勝

四天王寺 35－4 信愛
阪南 11－10 天王寺

▼3位決定戦

天王寺 13－11 信愛

▼決勝

四天王寺 33－6 阪南

◎南ブロック予選

〈男子〉

▼1回戦

和泉工 17－11 長野
富田林 棄権 岸和田産
久米田 19－10 金岡
岸和田 32－10 堺工
登美丘 23－8 泉大津
泉北 26－12 泉陽
貝塚南 12－8 堺上
商大堺 23－14 高石

▼2回戦

初芝 28－5 和泉工
富田林 24－6 信太
和泉 24－9 久米田
鳳 19－15 岸和田
大体大浪商 24－10 登美丘
泉北 30－5 堺東
貝塚南 19－3 堺東
三国丘 22－15 商大堺

▼3回戦

初芝 20－10 富田林
鳳 26－17 和泉
泉北 13－12 大体大浪商

三国丘 23－10 貝塚南

▼準決勝

初芝 20－11 鳳

泉北 14－11 三国丘

▼3位決定戦

三国丘 23－16 鳳

▼決勝

初芝 9－8 泉北

〈女子〉

▼1回戦

佐野 21－7 泉大津

▼2回戦

富田林 34－5 長野

東百舌鳥 6－5 岸和田

鳳 15－7 岸和田産

住吉学園 17－5 住吉商

初芝 36－6 佐野

高石 12－9 三国丘

久米田 22－7 和泉

堺東 15－7 泉北

▼3回戦

初芝 27－9 高石

堺東 24－10 久米田

富田林 19－7 東百舌鳥

住吉学園 28－7 鳳

▼準決勝

初芝 35－5 堺東

住吉学園 19－10 富田林

▼3位決定戦

富田林 14－10 堺東

▼決勝

初芝 30－9 住吉学園

◎中央大会

〈男子〉

▼1回戦

摂陵 17－14 阪南

都島工 23－15 三国丘

初芝 13－11 桜宮

上宮 26－14 長尾

北陽 23－6 摂津

此花学院 29－12 泉北

桃山学院 33－8 鳳

大商学園 31－12 春日丘

▼2回戦

都島工 20－13 摂陵

上宮 20－15 初芝

北陽 14－6 此花学院

桃山学院 26－5 大商学園

▼5～8位決定リーグ

初芝 18－14 摂陵

初芝 21－16 此花学院

初芝 20－15 大商学園

此花学院 20－12 摂陵

此花学院 22－12 大商学園

摂陵 18－17 大商学園

▼決勝リーグ

桃山学院 14－11 都島工

桃山学院 20－18 上宮

桃山学院 17－14 北陽

都島工 23－10 上宮

都島工 18－12 北陽

北陽 18－14 上宮

〔順位〕①桃山学院②都島工③北陽④上宮⑤初芝⑥此花学院⑦摂陵⑧大商学園

〈女子〉

▼1回戦

四天王寺 39－6 堺東

福島女 11－9 摂津

初芝 28－4 信愛

西寝屋川 21－11 金蘭会

宣真 35－2 大阪市立

阪南 15－12 富田林

春日丘 15－6 東豊中

天王寺 13－10 住吉学園

▼2回戦

四天王寺 13－8 福島女

初芝 19－15 西寝屋川

宣真 32－4 阪南

天王寺 11－10 春日丘

▼決勝リーグ

宣真 20－11 四天王寺

宣真 18－10 初芝

宣真 30－3 天王寺

初芝 19－16 四天王寺

初芝 19－13 天王寺

四天王寺 22－10 天王寺

〔順位〕①宣真②初芝③四天王寺④天王寺

九州

全国高校福岡県予選

（6月3、10日／新宮高、香椎高）

〈男子〉

▼1回戦

久工大附 36－4 小倉工

春日 15－14 筑紫丘

若松 11－9 泰星

福岡西陵 15－11 明善

福岡 17－13 太宰府

香椎 26－12 田川工

武蔵台 13－10 小倉西

九州産 36－4 東海大五

▼2回戦

久工大附 25－10 春日

若松 19－11 福岡西陵

福岡 26－10 香椎

九州産 27－8 武蔵台

▼準決勝

久工大附 28－9 若松

福岡 15－14 九州産

▼決勝

久工大附 18（10－5、8－4）9 福岡

〈女子〉

▼1回戦

福岡南女 13－11 小倉商

春日 14－3 中村女

宗像 12－10 三池

▼2回戦

筑紫女 17－2 武蔵台

九州女 26－4 福岡南女

三井 12－6 春日

新宮 19－4 宗像

▼準決勝

九州女 23－11 筑紫女

新宮 19－11 三井

▼決勝

九州女 13（6－6、7－3）9 新宮

'91広島
アジアハンドボール選手権大会
を成功させよう!!

—第6回男子・第3回女子アジアハンドボール選手権大会
兼バルセロナオリンピックアジア地区予選—

〔日程〕　一九九一年八月二十二日㈭〜九月一日㈰

〔大会会場〕　広島サンプラザ・広島市東区スポーツセンター

㈶日本ハンドボール協会
広島県ハンドボール協会

（財）日本ハンドボール協会編
『ハンドボール』
第三〇〇号
昭和四十年六月七日 平成二年七月二十六日 印刷
第三種郵便物認可 平成二年八月一日 発行
東京都渋谷区神南一－一－一
電話 代表 (481) 二三六一
振替 東京 六－五八三四八番
編集兼発行人 安藤純光
定価三百五拾円（年間購読料三千三百円）